

乱択近似
(randomized approximation)

1. 離散アルゴリズム

1-1. MCMC法における近似精度保証

マルコフ連鎖モンテカルロ法
(Markov chain **Monte Carlo**)

*来嶋 秀治

京都大学 数理解析研究所



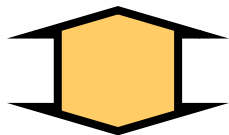
1: イントロダクション

モンテカルロ法とは

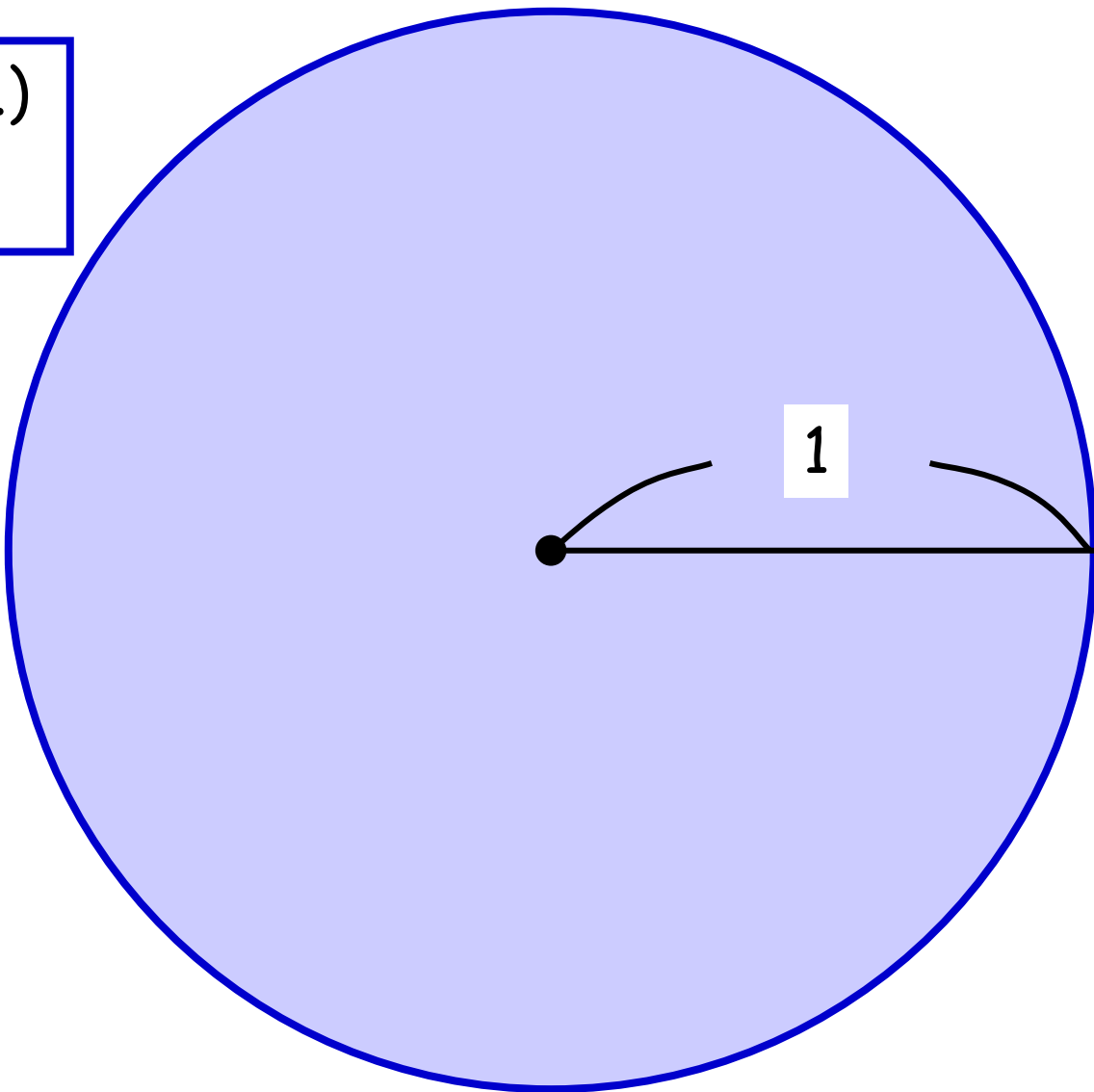
モンテカルロ法 - 円周率の計算を例に

円周率 π の値 (=3.141...)

を求めよ.



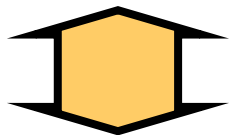
$\pi = (\text{半径}1\text{の円の面積})$



モンテカルロ法 - 円周率の計算を例に

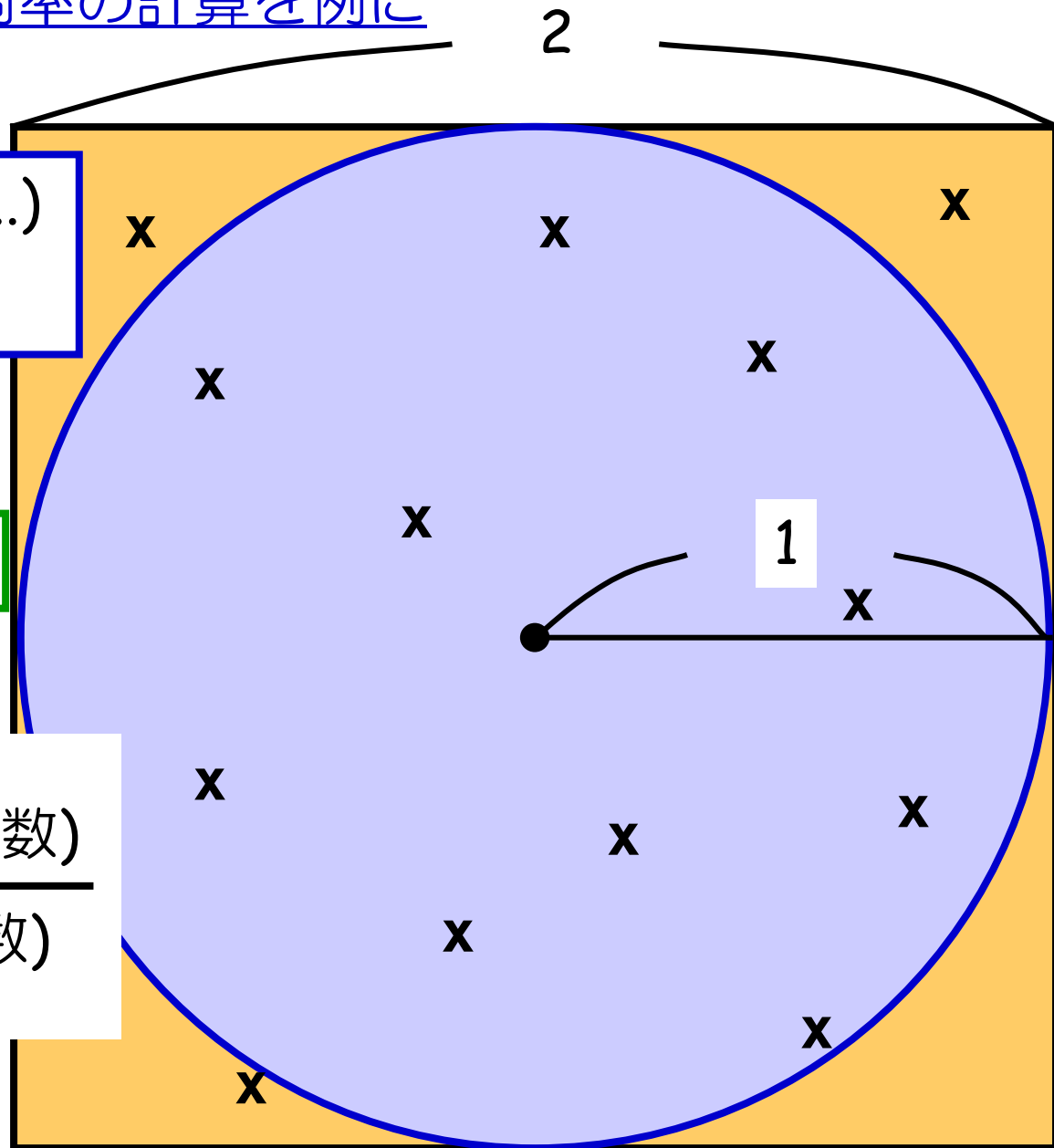
円周率 π の値 (=3.141...)

を求めよ。



$\pi = (\text{半径1の円の面積})$

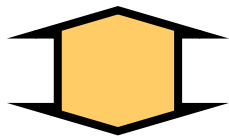
$$\pi = 4 \times \frac{(\text{円の中の点の数})}{(\text{打った点の数})}$$



モンテカルロ法 - 円周率の計算を例に

円周率 π の値 (=3.141...)

を求めよ。



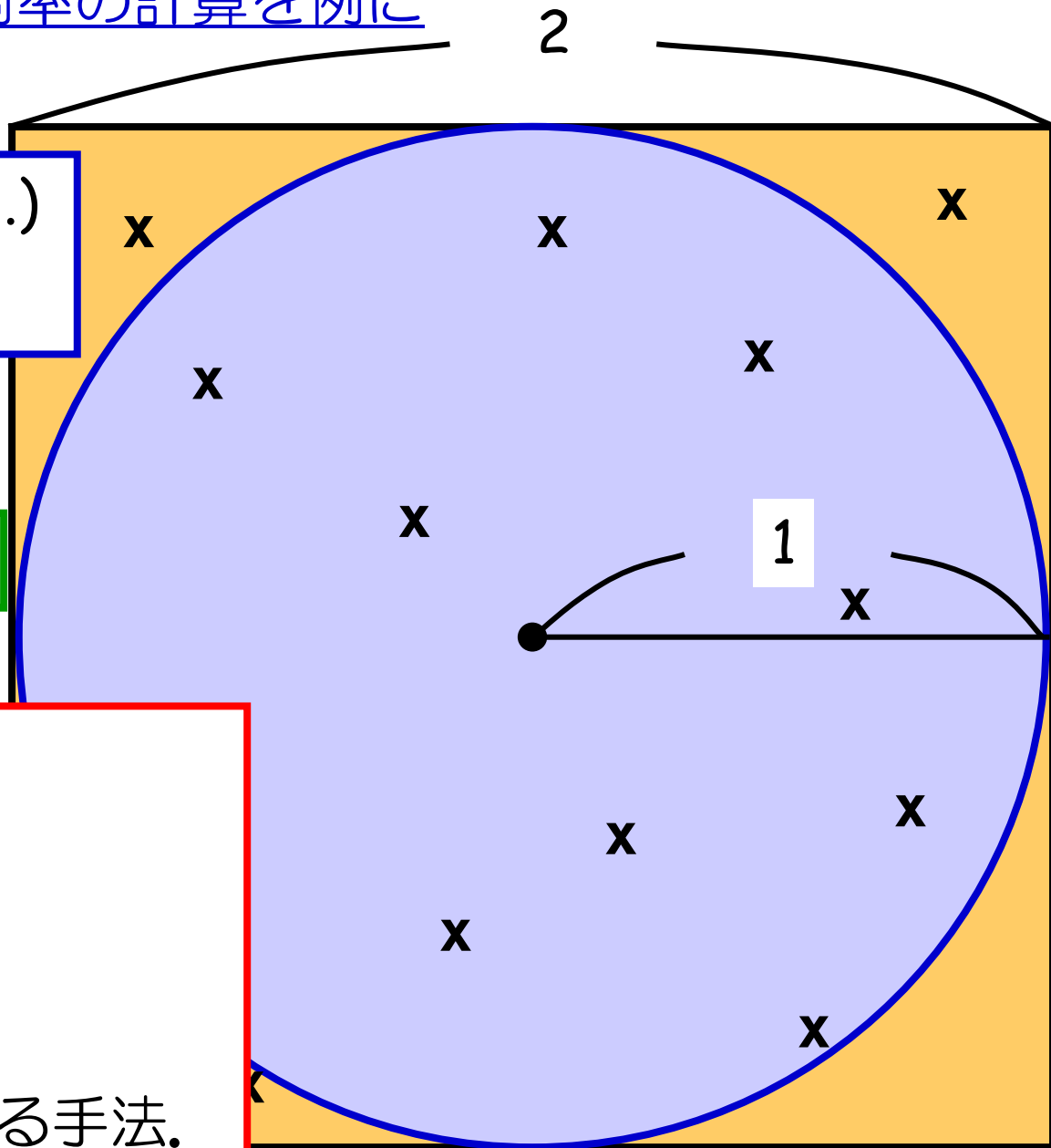
$\pi = (\text{半径1の円の面積})$

モンテカルロ法

乱数を使用して、

- ・ 比
- ・ 平均

などを近似的に計算する手法。



2次元領域の面積計算

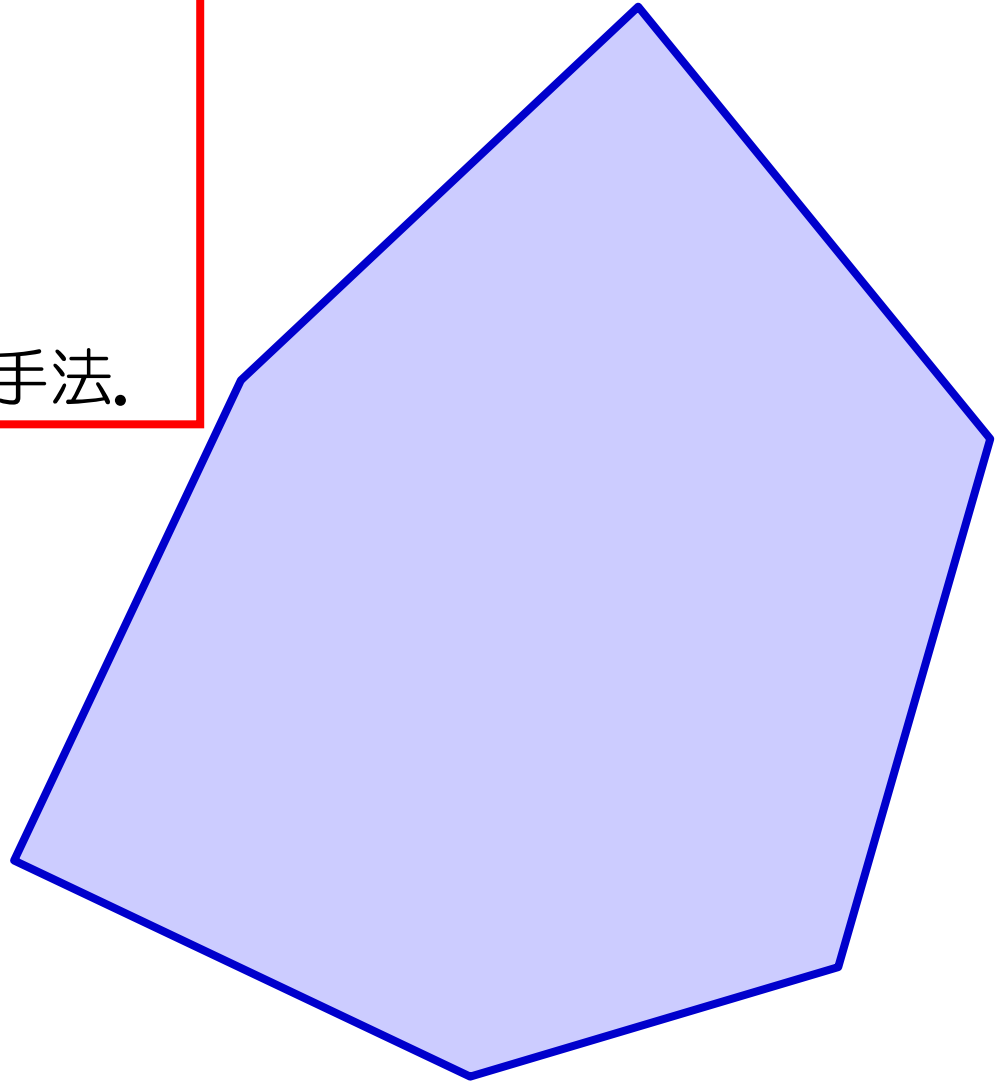
モンテカルロ法

乱数を使用して、

- ・ 比
- ・ 平均

などを近似的に計算する手法。

( の面積) =



2次元領域の面積計算

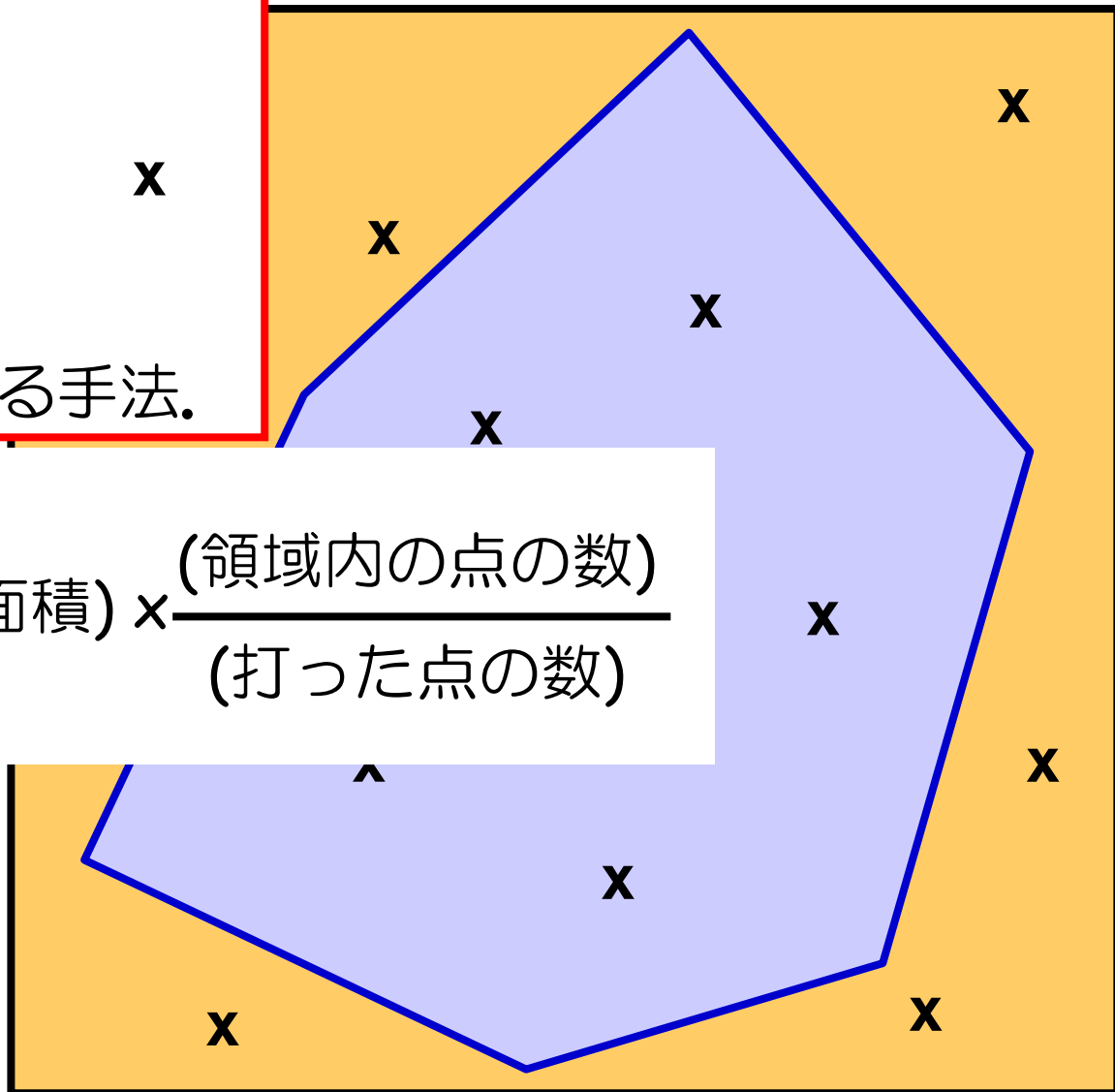
モンテカルロ法

乱数を使用して、

- ・ 比
- ・ 平均

などを近似的に計算する手法。

$$\left(\text{多角形の面積} \right) = \left(\text{正方形の面積} \right) \times \frac{\text{(領域内の点の数)}}{\text{(打った点の数)}}$$



2次元領域の面積計算

モンテカルロ法

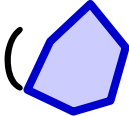

乱数を使用して、

- ・ 比
- ・ 平均

などを近似的に計算する手法。

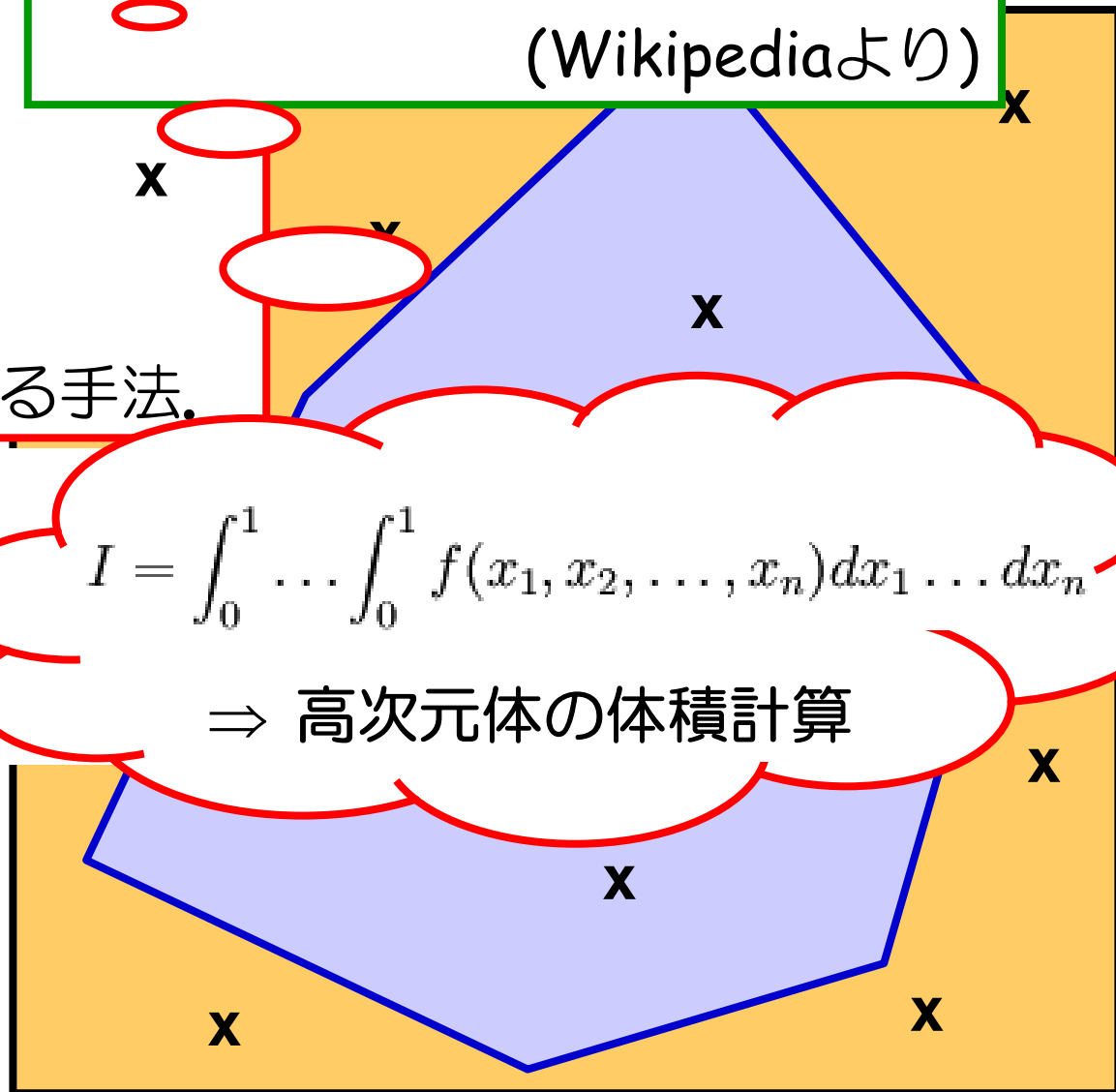
重積分に強いという特徴がある。

(Wikipediaより)

( の面積) = ( の

$$I = \int_0^1 \cdots \int_0^1 f(x_1, x_2, \dots, x_n) dx_1 \cdots dx_n$$

⇒ 高次元体の体積計算

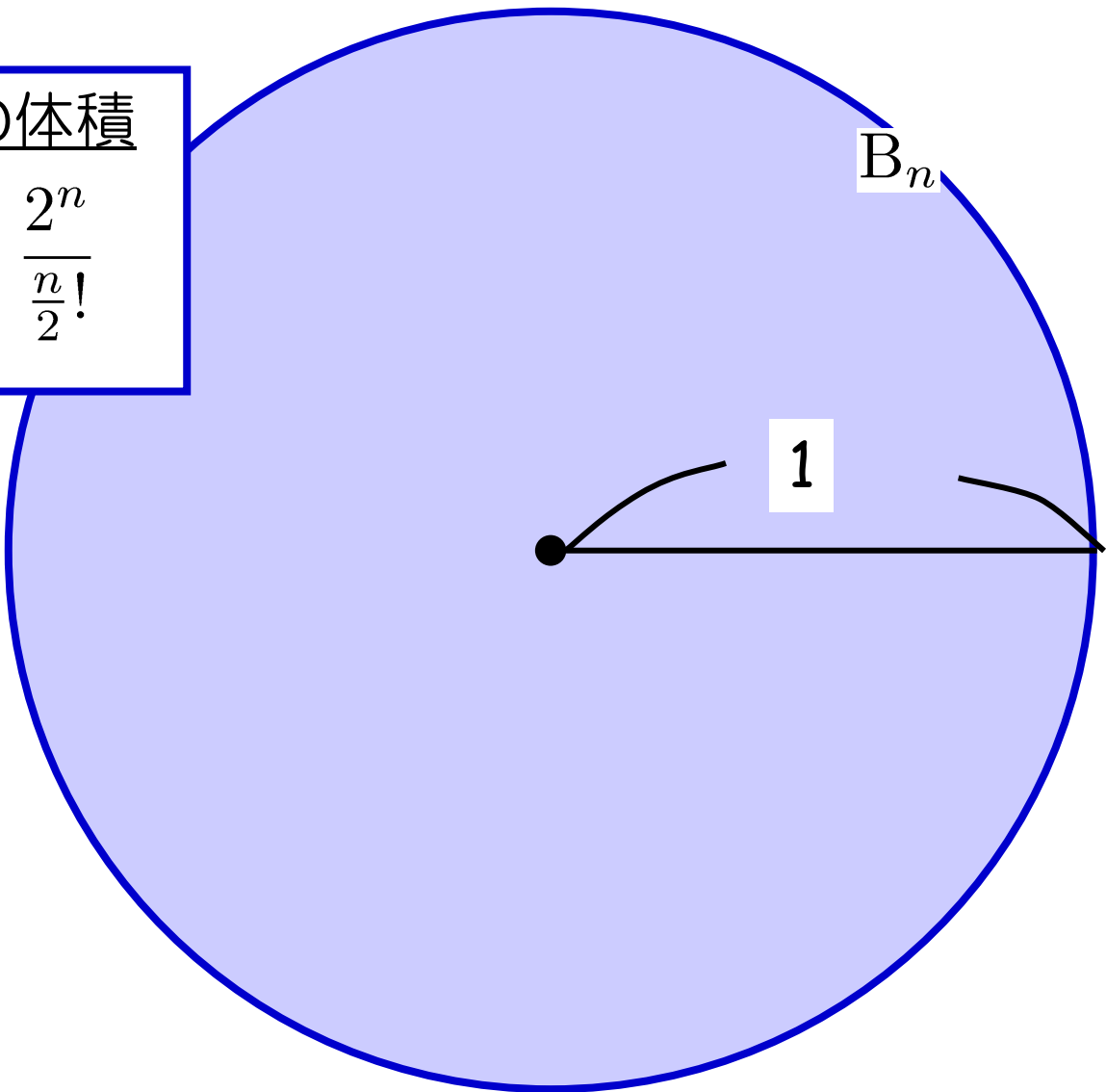


高次元の呪い - 球を例に

n 次元球 B_n の体積

n 次元ユークリッド球の体積

$$V(B_n) = \frac{\pi^{\frac{n}{2}}}{\Gamma(\frac{n}{2} + 1)} < \frac{2^n}{\frac{n!}{2}}$$



高次元の呪い - 球を例に

n 次元球 B_n の体積

n 次元ユークリッド球の体積

$$V(B_n) = \frac{\pi^{\frac{n}{2}}}{\Gamma(\frac{n}{2} + 1)} < \frac{2^n}{\frac{n}{2}!}$$

C_n 上の一様ランダムな点が B_n に入る確率

$$\frac{V(B_n)}{V(C_n)} = \frac{V(B_n)}{2^n} < \frac{1}{\frac{n}{2}!}$$

$< 10^{-60}$ ($n=100$ の時)

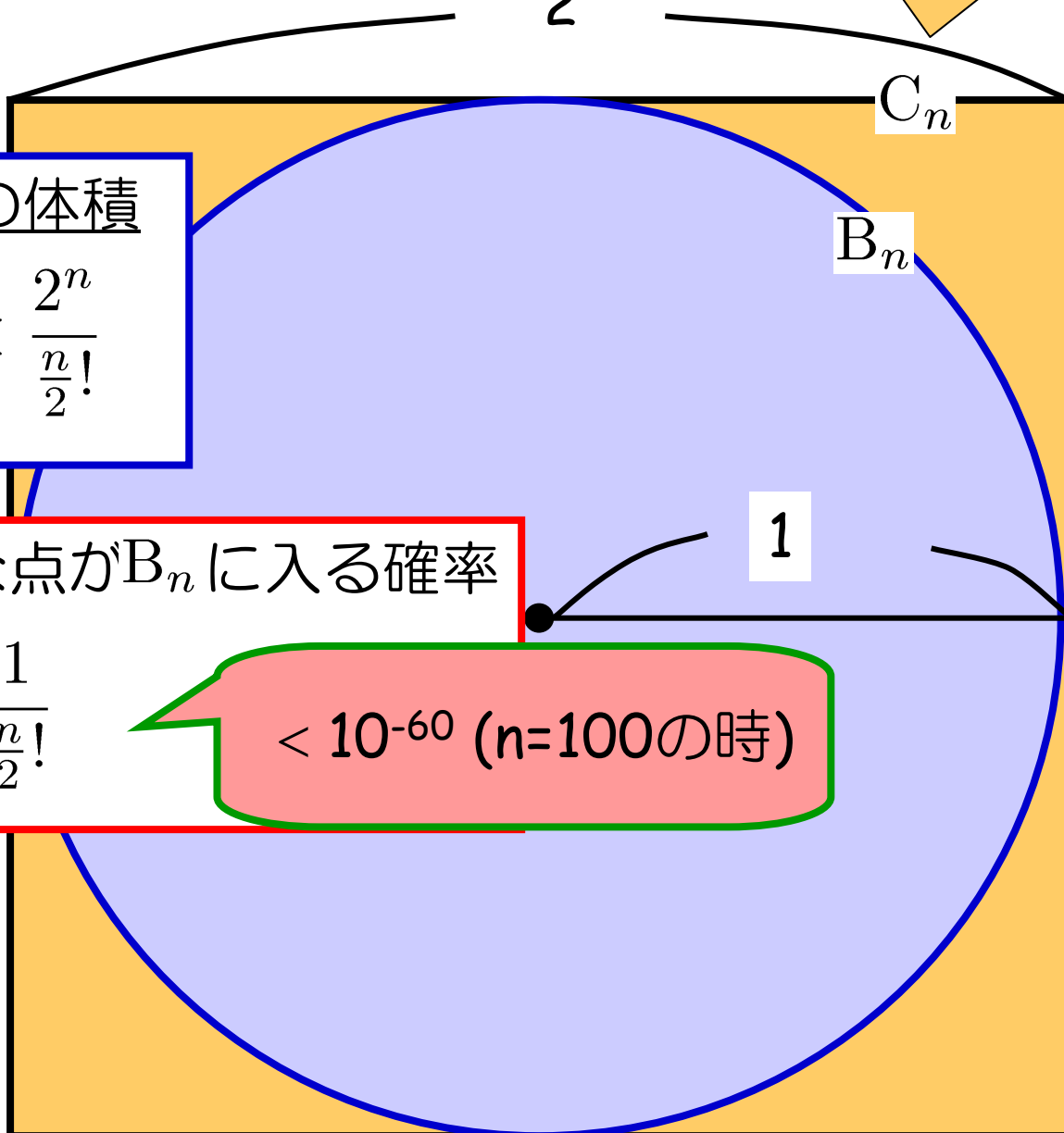
外接 n 次元超立方体

2

C_n

B_n

1

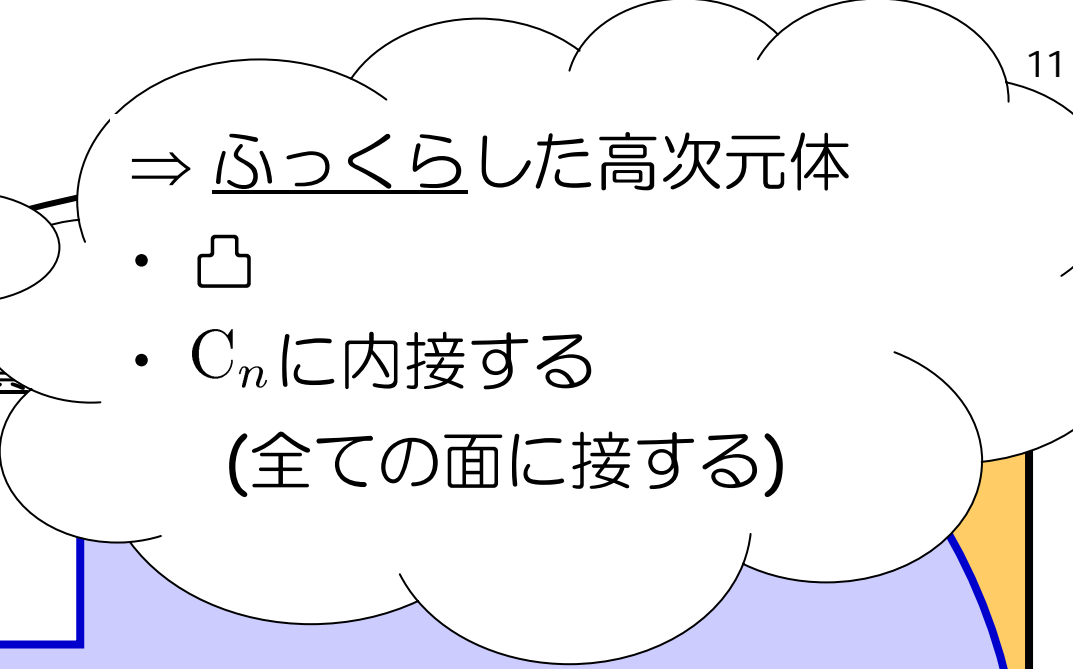


高次元の呪い - 球を例に

n次元球 B_n の体積

n次元ユークリッド球の体積

$$V(B_n) = \frac{\pi^{\frac{n}{2}}}{\Gamma(\frac{n}{2} + 1)} < \frac{2^n}{\frac{n}{2}!}$$

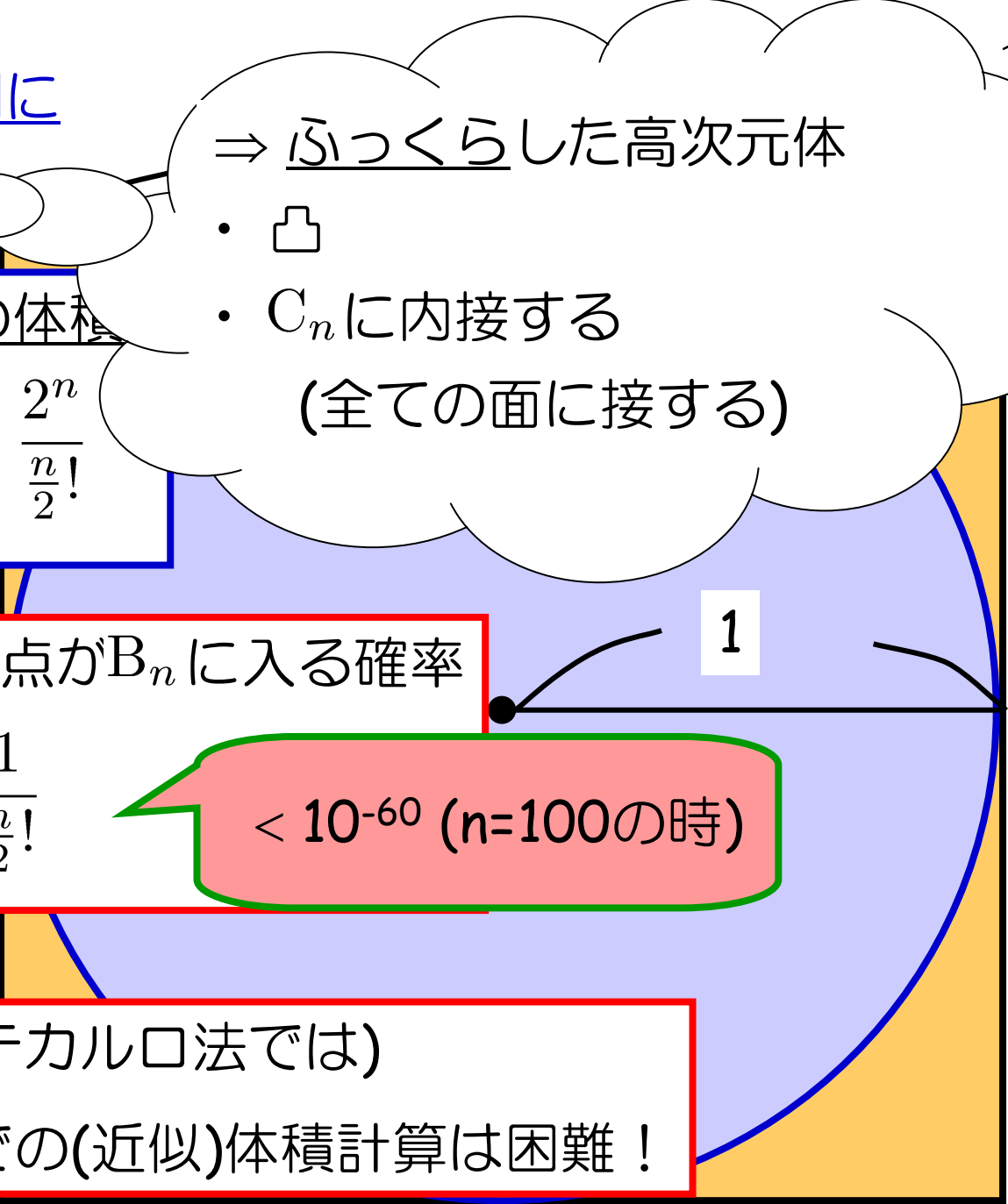


C_n 上の一様ランダムな点が B_n に入る確率

$$\frac{V(B_n)}{V(C_n)} = \frac{V(B_n)}{2^n} < \frac{1}{\frac{n}{2}!}$$

$< 10^{-60}$ (n=100の時)

⇒ (素朴なモンテカルロ法では)
多項式時間での(近似)体積計算は困難！



数え上げ，積分の計算困難性

n次元凸体の体積の計算 => #P困難

乱択近似
(randomized approximation)

#P: 数え上げ問題に対する
計算量クラス。
#P困難 \subset NP困難

FPRAS (Fully Polynomial-time Randomized Approximation Scheme)
(全多項式時間乱択近似計算法)

A: 真の値
Z: 近似値

$$\Pr \left[\frac{|Z - A|}{A} \leq \varepsilon \right] \geq 1 - \delta$$

cf. FPTAS

MCMC法による解決

マルコフ連鎖を用いたランダム生成法 + モンテカルロ法

MCMC法における近似精度保証 - Table of Contents

1. イントロダクション
2. マルコフ連鎖を用いたランダム生成法
3. 高次元凸体の体積計算
4. 離散構造と数え上げ
 - 4.1. ナップサック解の数え上げ
 - 4.2. 2元分割表の数え上げ
5. パーマネントの計算
6. まとめ

MCMC法

マルコフ連鎖を用いたランダム生成法 + モンテカルロ法

2: マルコフ連鎖を用いたランダム生成法

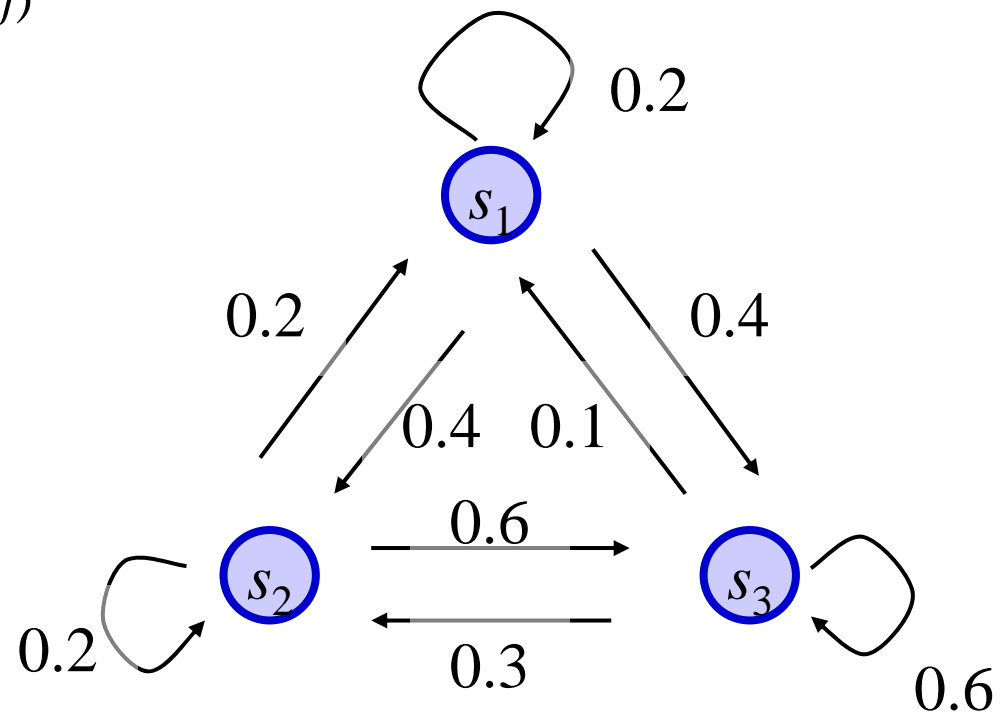
マルコフ連鎖の定常分布

- マルコフ連鎖 M (エルゴード的)

- 状態空間: Ω (有限)

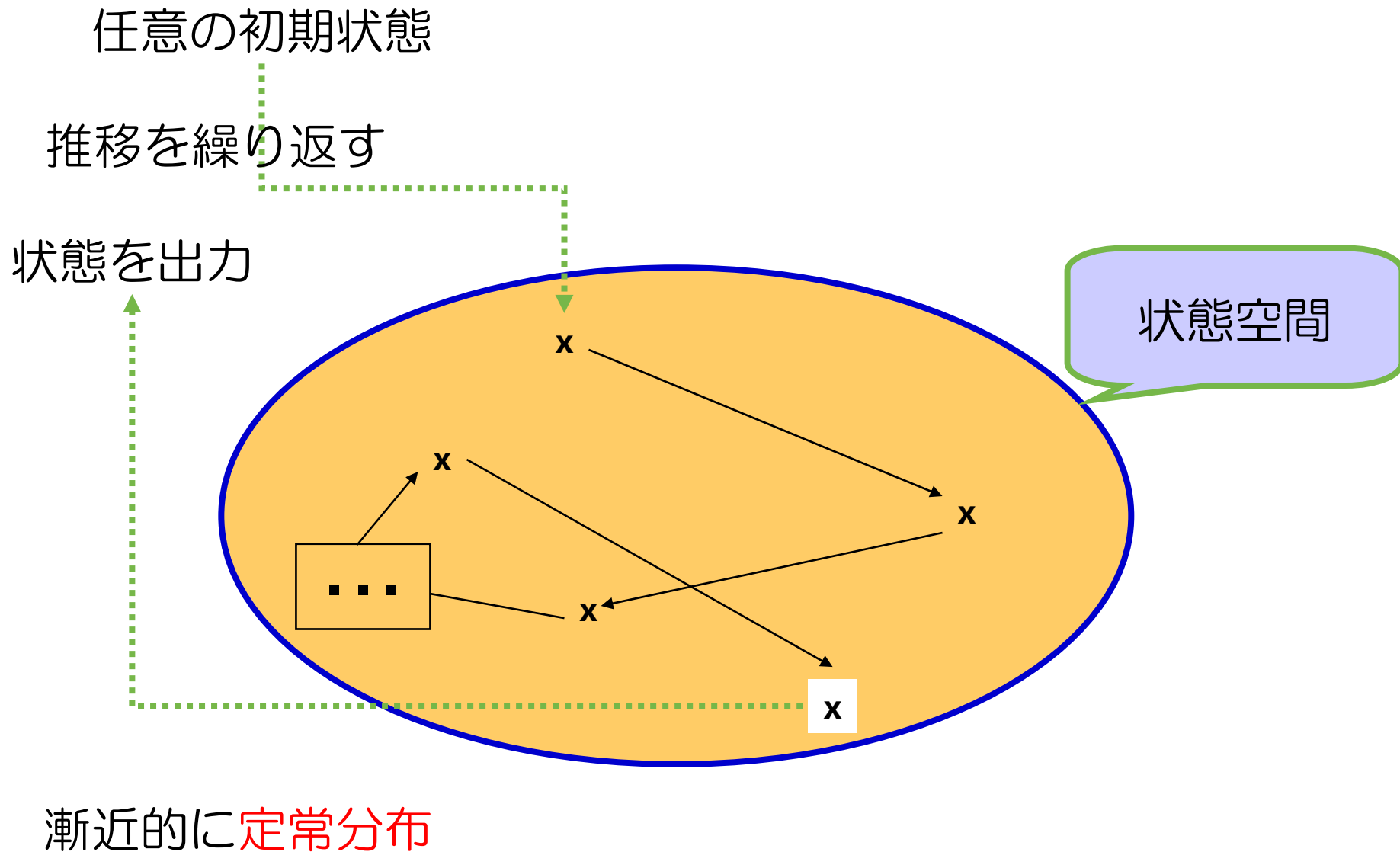
- 推移規則: 推移確率行列 P によって推移する

$$P_{ij} = \Pr(\text{推移 } i \rightarrow j) = P(i, j)$$



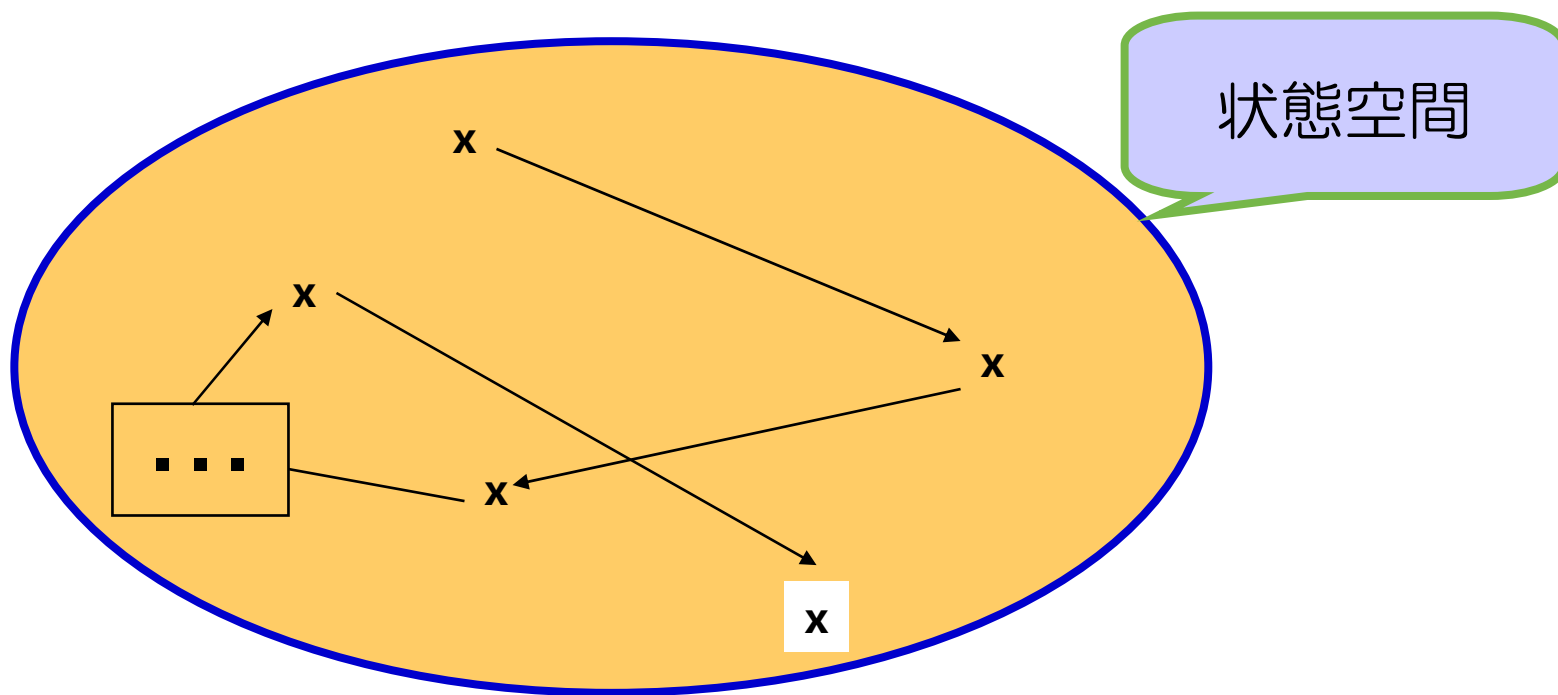
状態遷移図

マルコフ連鎖の極限分布



「マルコフ連鎖を用いたサンプリング法」のアイデア

1. 目的の分布を定常分布にもつマルコフ連鎖を設計する。
2. 十分な回数推移させて、定常分布からサンプリングする。



漸近的に定常分布

MCMC法における近似精度保証 - Table of Contents

1. イントロダクション
2. マルコフ連鎖を用いたランダム生成法
3. 高次元凸体の体積計算
4. 離散構造と数え上げ
 - 4.1. ナップサック解の数え上げ
 - 4.2. 2元分割表の数え上げ
5. パーマネントの計算
6. まとめ



3: 高次元凸体の体積計算

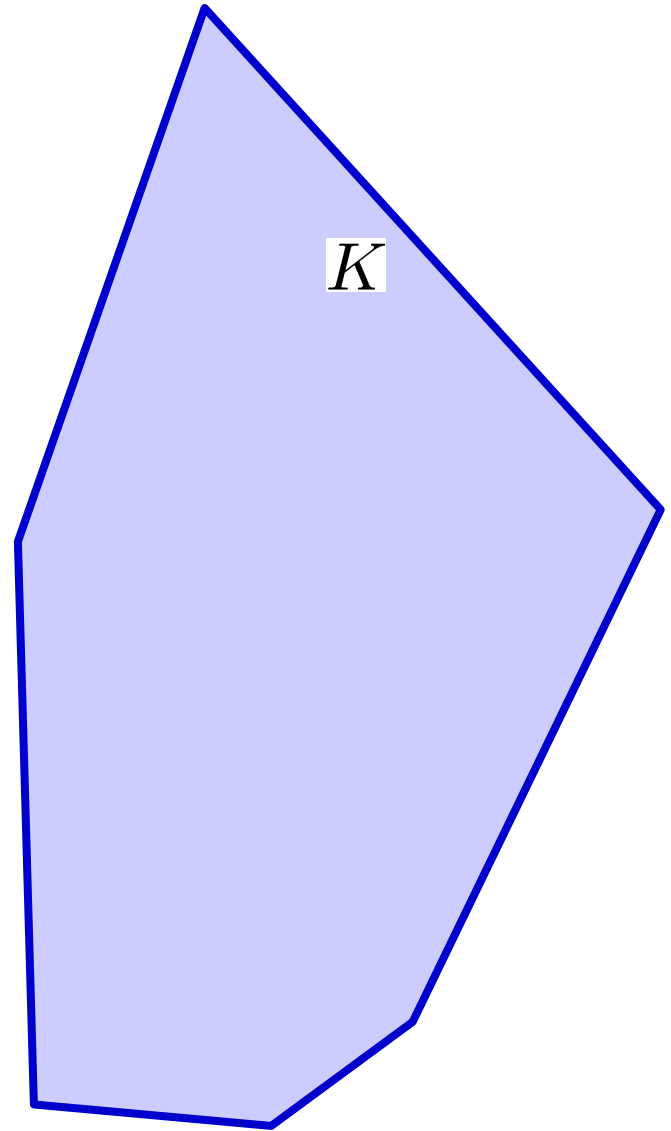
[Dyer, Frieze, Kannan 1991]

再帰的なモンテカルロ法

問題: 高次元凸体の体積計算

K : n 次元凸体

体積 $V(K)$ を計算



仮定: ふっくらとした凸体

K : n 次元凸体

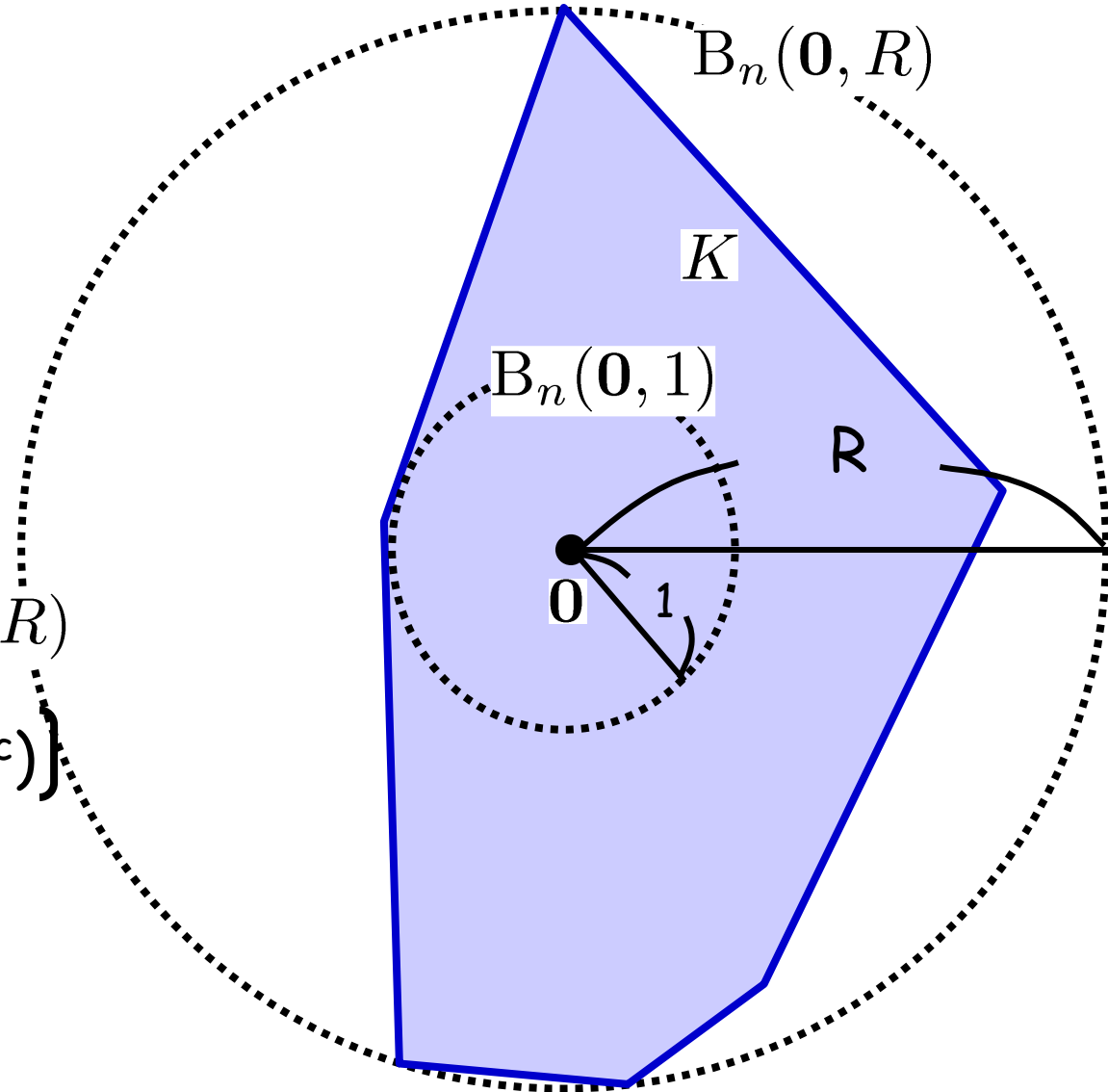
体積 $V(K)$ を計算

仮定

K はふっくらとしている

$$B_n(\mathbf{0}, R) \subseteq K \subseteq B_n(\mathbf{0}, R)$$

$$\{R = O(n^c)\}$$



K上の一様ランダム生成 - Ball walk

Bal-walk

X: 現在の点

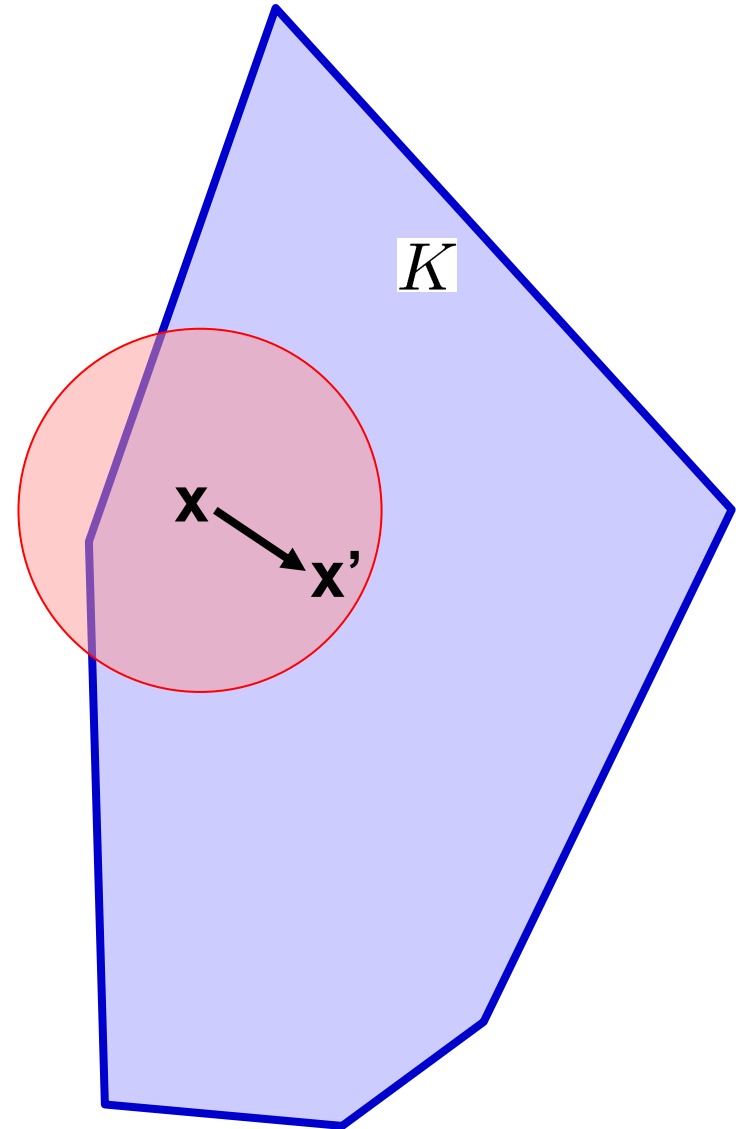
X': 次の時刻の点

Step 1.

$Y : B_n(X, a)$ 中の
一様ランダムな点を選ぶ。

Step 2.

$$X' = \begin{cases} Y & (Y \in K) \\ X & (Y \notin K) \end{cases}$$



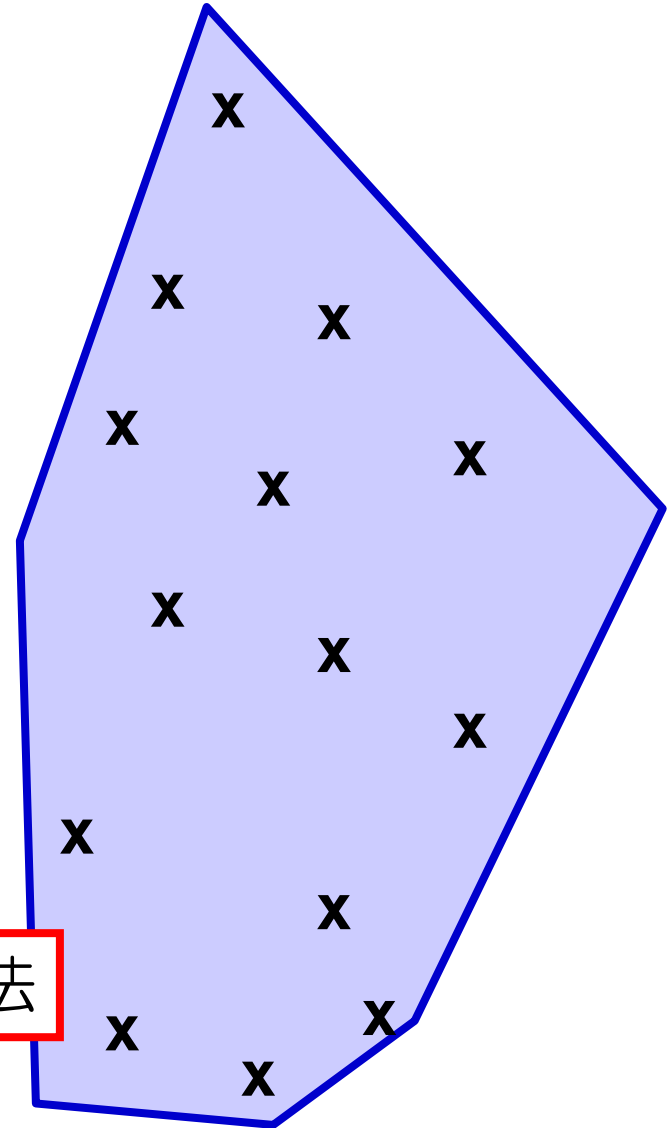
定常分布はK上の一様分布

K上の一様ランダム生成

(ふいっくらしした凸体に対して)
Ball-walkを用いて,
一様ランダムサンプリング可能

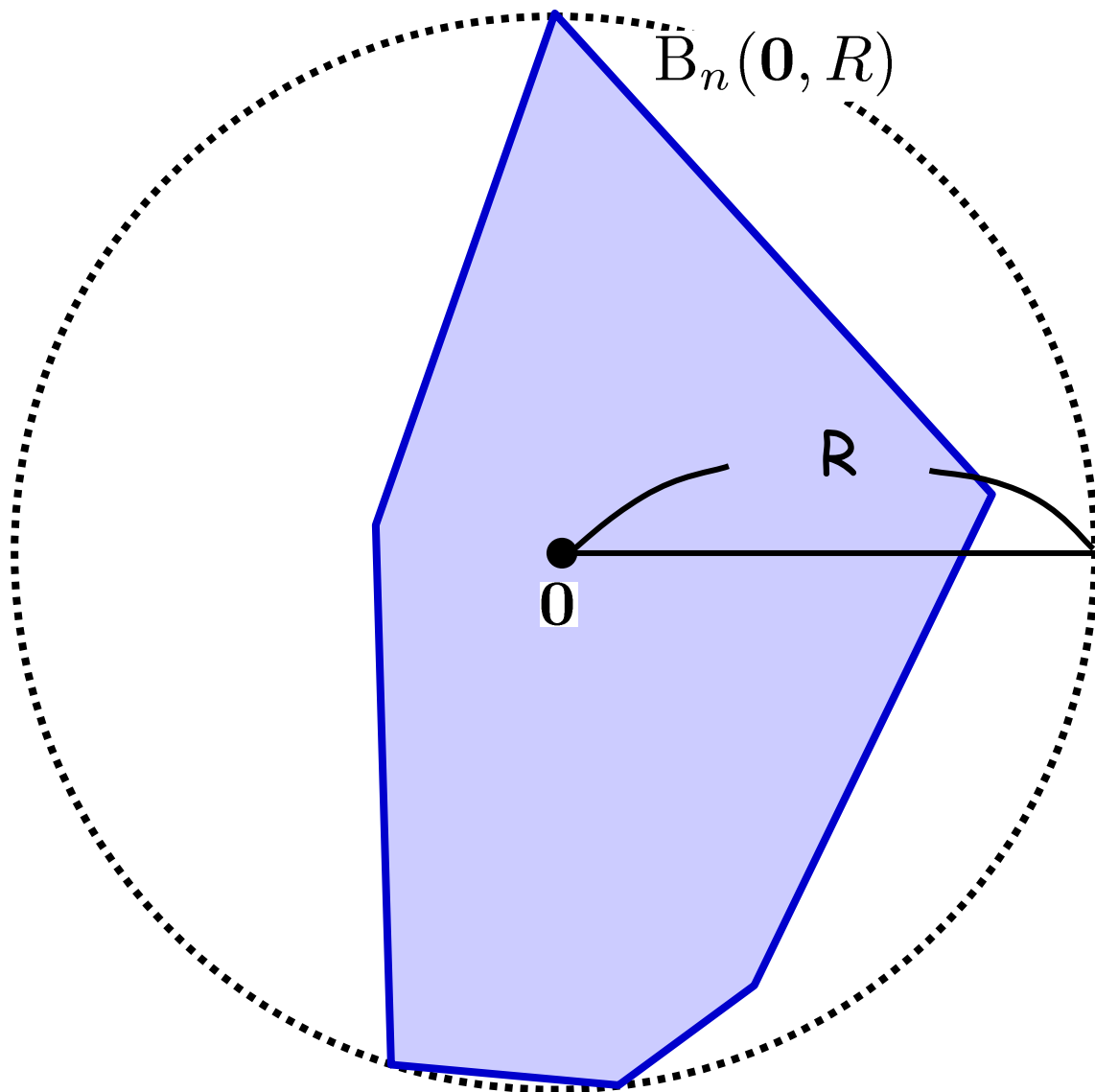
どうやって,
体積を計算するのか?

再帰的アルゴリズム + モンテカルロ法



再帰のアイデア

K : n 次元凸体
体積 $V(K)$ を計算

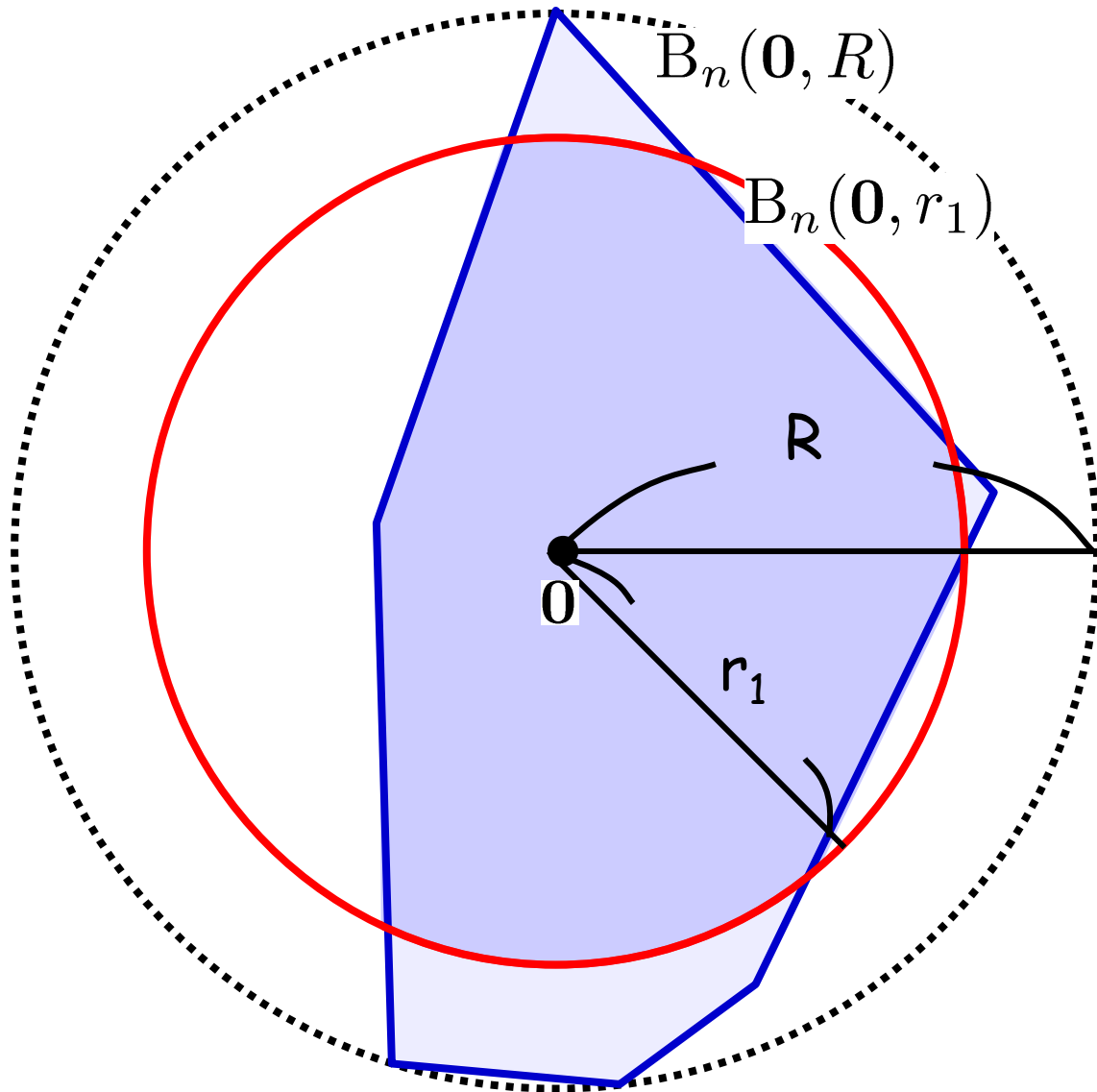


再帰のアイデア

K : n 次元凸体
体積 $V(K)$ を計算

$$K_1 \stackrel{\text{def.}}{=} K \cap B_n(\mathbf{0}, r_1)$$

$$V(K) = \frac{V(K)}{V(K_1)} \cdot V(K_1)$$



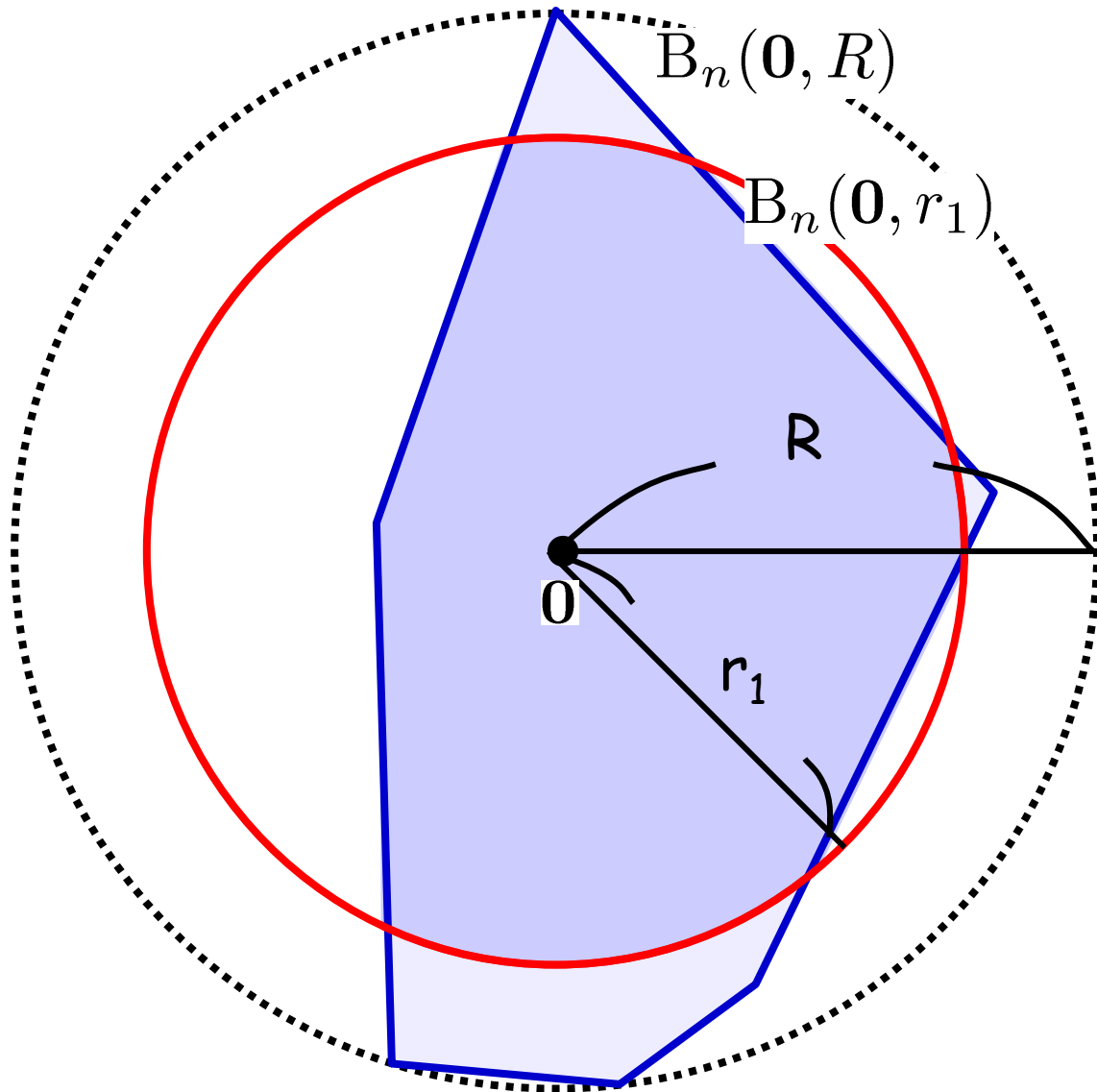
再帰のアイデア

K : n 次元凸体
体積 $V(K)$ を計算

$$K_1 \stackrel{\text{def.}}{=} K \cap B_n(\mathbf{0}, r_1)$$

$$V(K) = \frac{V(K)}{V(K_1)} \cdot V(K_1)$$

↑
モンテカルロ法で計算



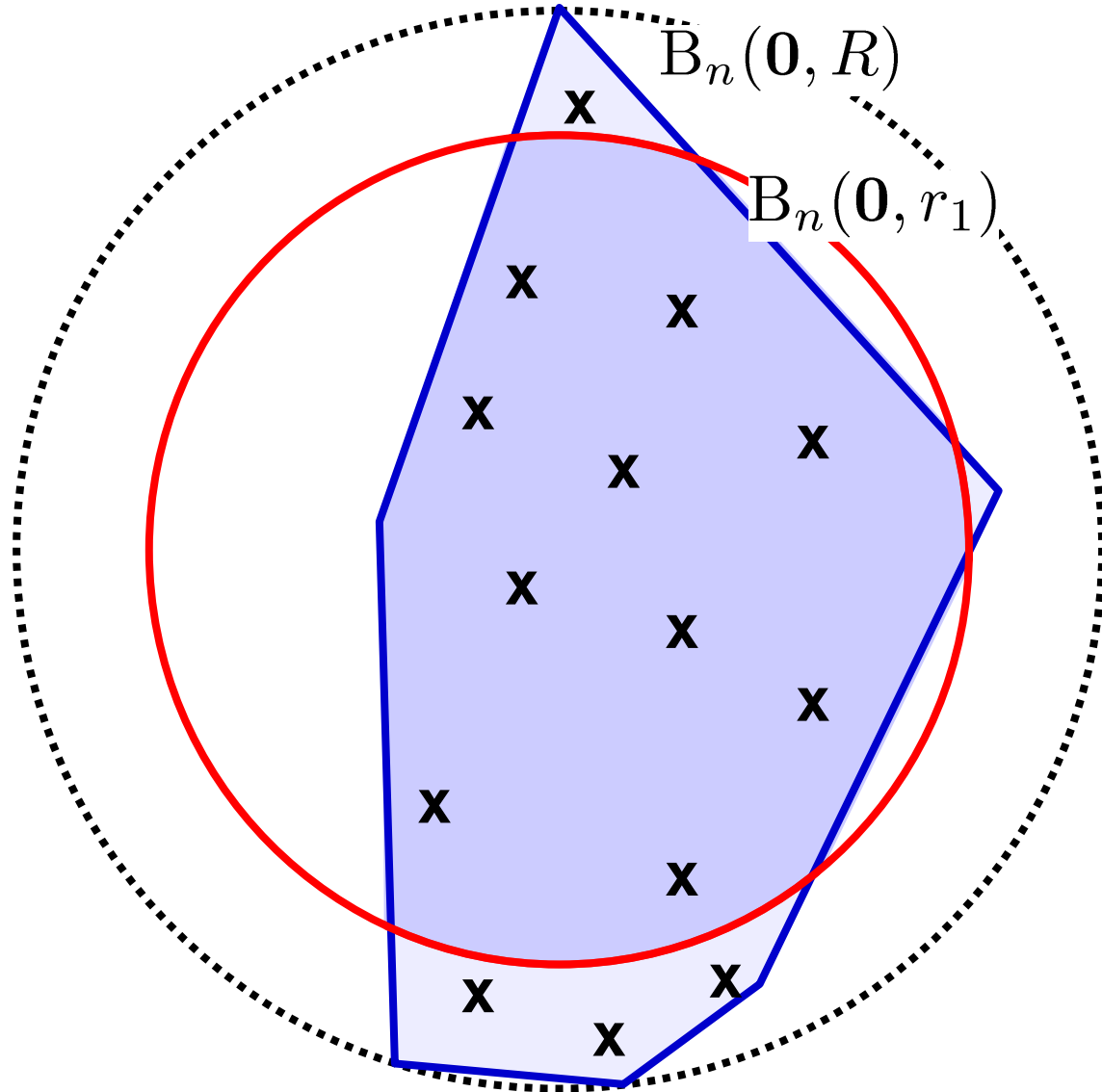
再帰のアイデア

K : n 次元凸体
体積 $V(K)$ を計算

$$K_1 \stackrel{\text{def.}}{=} K \cap B_n(\mathbf{0}, r_1)$$

$$V(K) = \frac{V(K)}{V(K_1)} \cdot V(K_1)$$

↑
モンテカルロ法で計算



再帰のアイデア

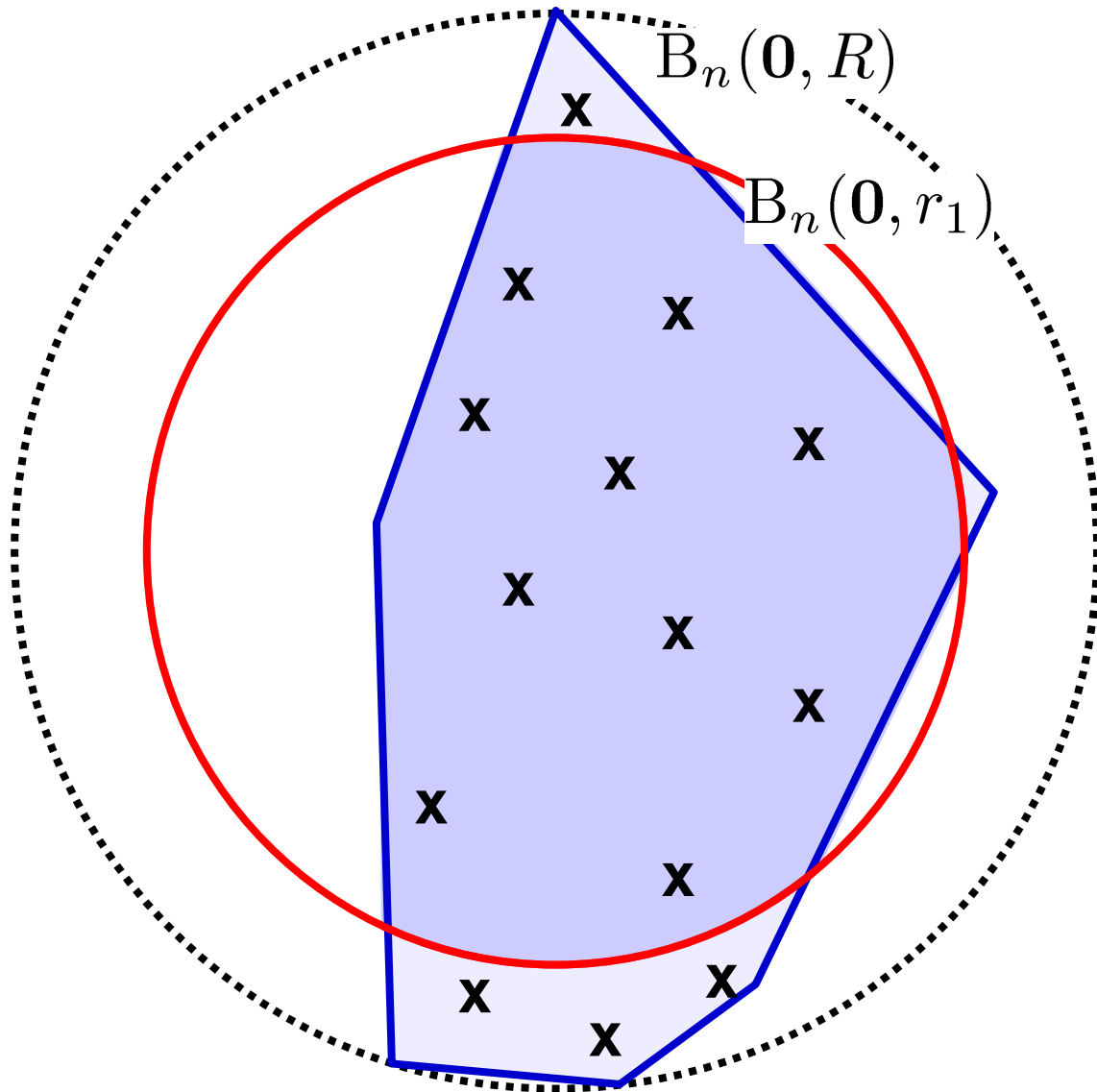
K : n 次元凸体
体積 $V(K)$ を計算

$$K_1 \stackrel{\text{def.}}{=} K \cap B_n(\mathbf{0}, r_1)$$

$$V(K) = \frac{V(K)}{V(K_1)} \cdot V(K_1)$$

↑
モンテカルロ法で計算

K_1 : n 次元凸体
体積 $V(K_1)$ を計算



再帰のアイデア

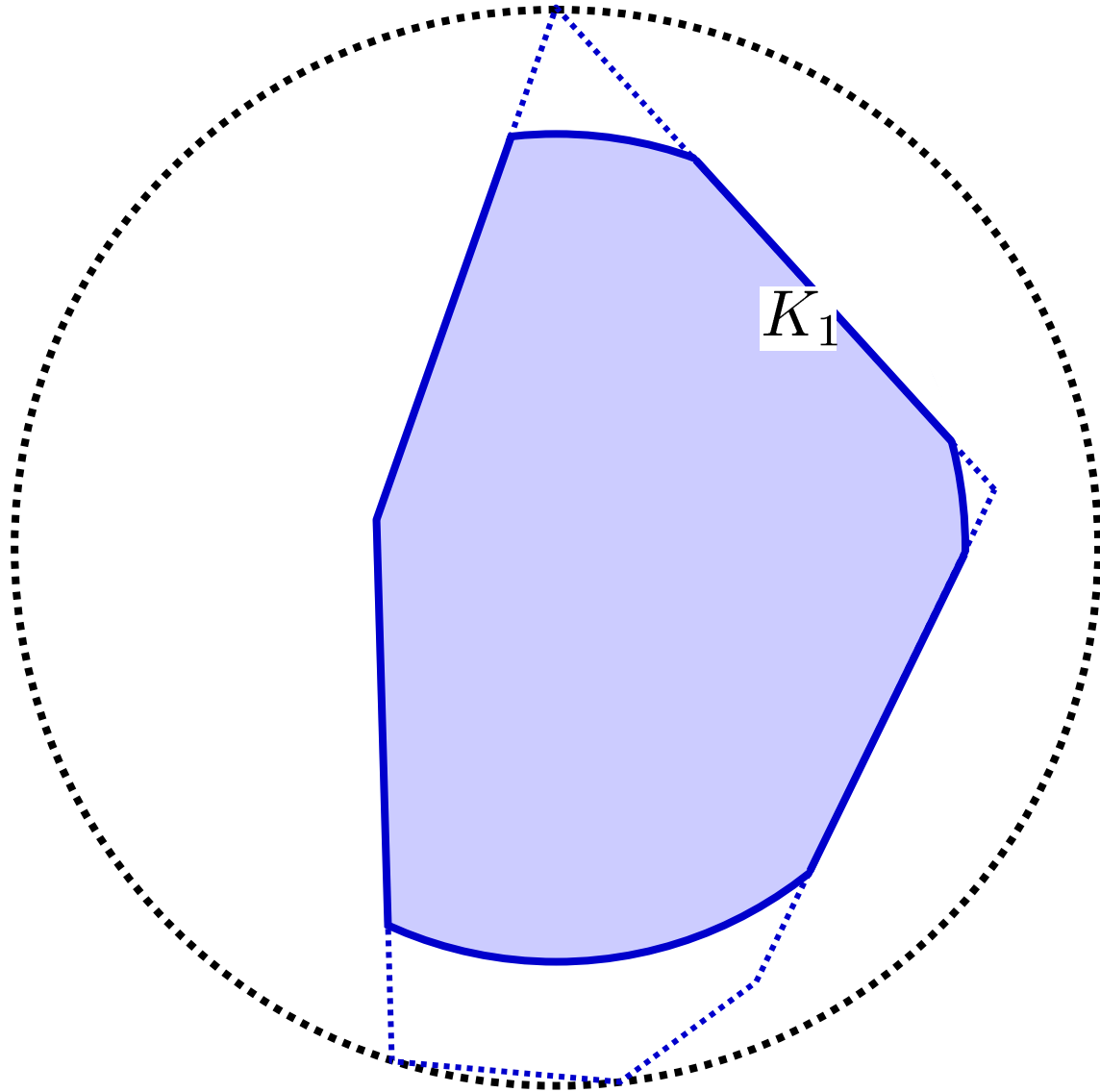
K : n 次元凸体
体積 $V(K)$ を計算

$$K_1 \stackrel{\text{def.}}{=} K \cap B_n(\mathbf{0}, r_1)$$

$$V(K) = \frac{V(K)}{V(K_1)} \cdot V(K_1)$$

↑
モンテカルロ法で計算

K_1 : n 次元凸体
体積 $V(K_1)$ を計算



再帰のアイデア

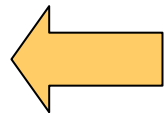
K : n 次元凸体
体積 $V(K)$ を計算

$$K_1 \stackrel{\text{def.}}{=} K \cap B_n(\mathbf{0}, r_1)$$

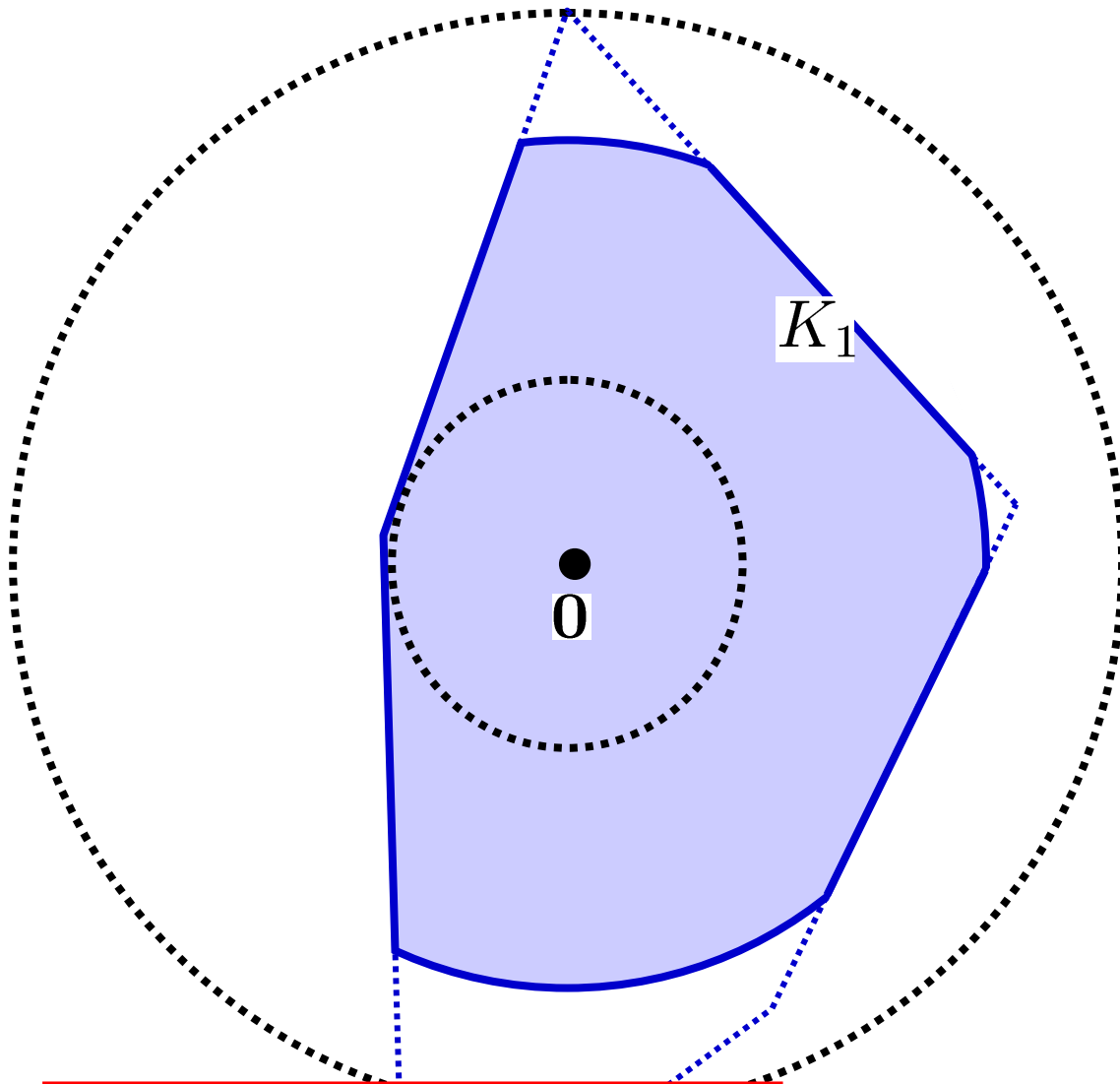
$$V(K) = \frac{V(K)}{V(K_1)} \cdot V(K_1)$$

↑
モンテカルロ法で計算

K_1 : n 次元凸体
体積 $V(K_1)$ を計算

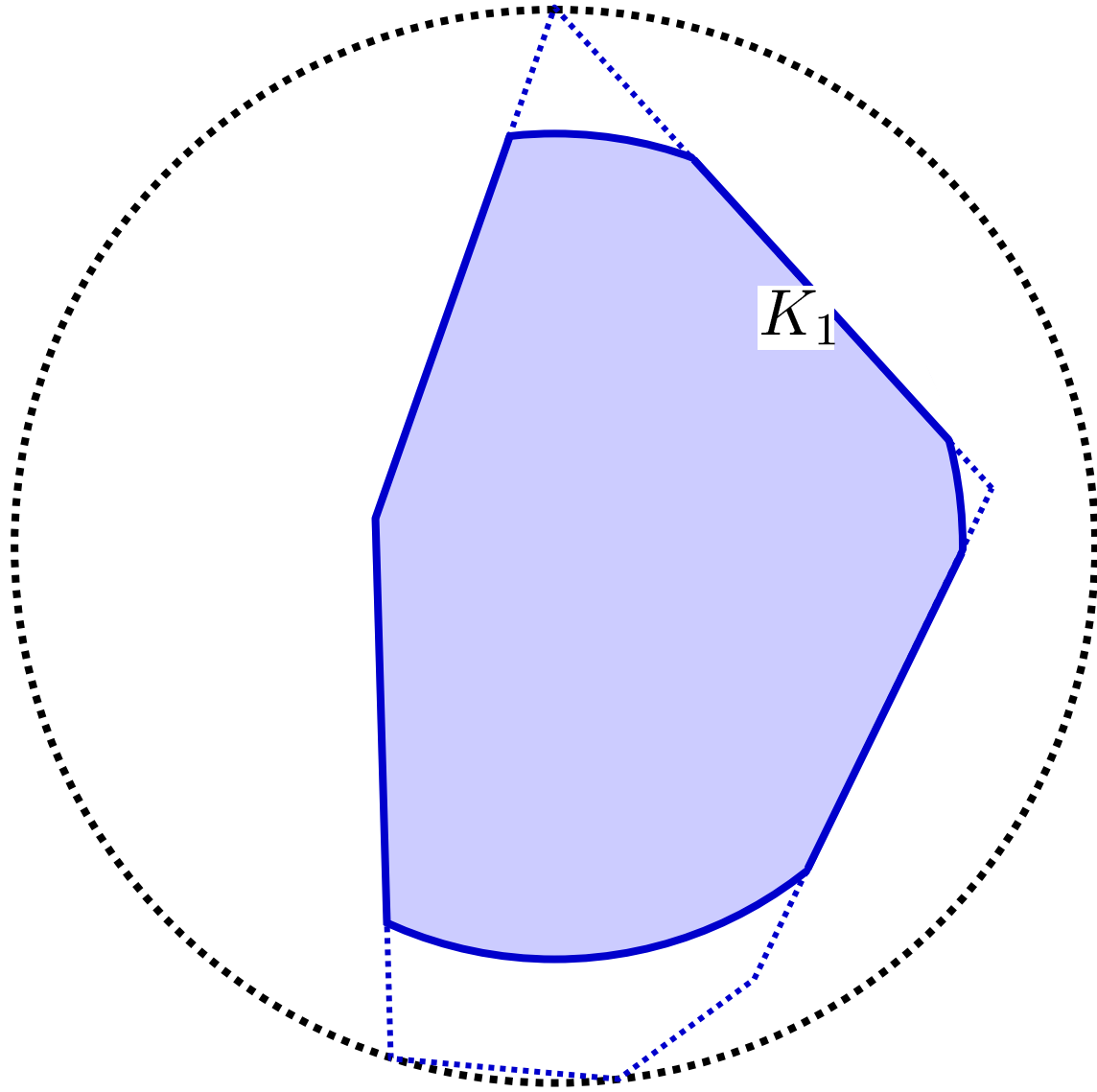


K_1 はふっくらとしている



再帰のアイデア

K_1 : n 次元凸体
体積 $V(K_1)$ を計算

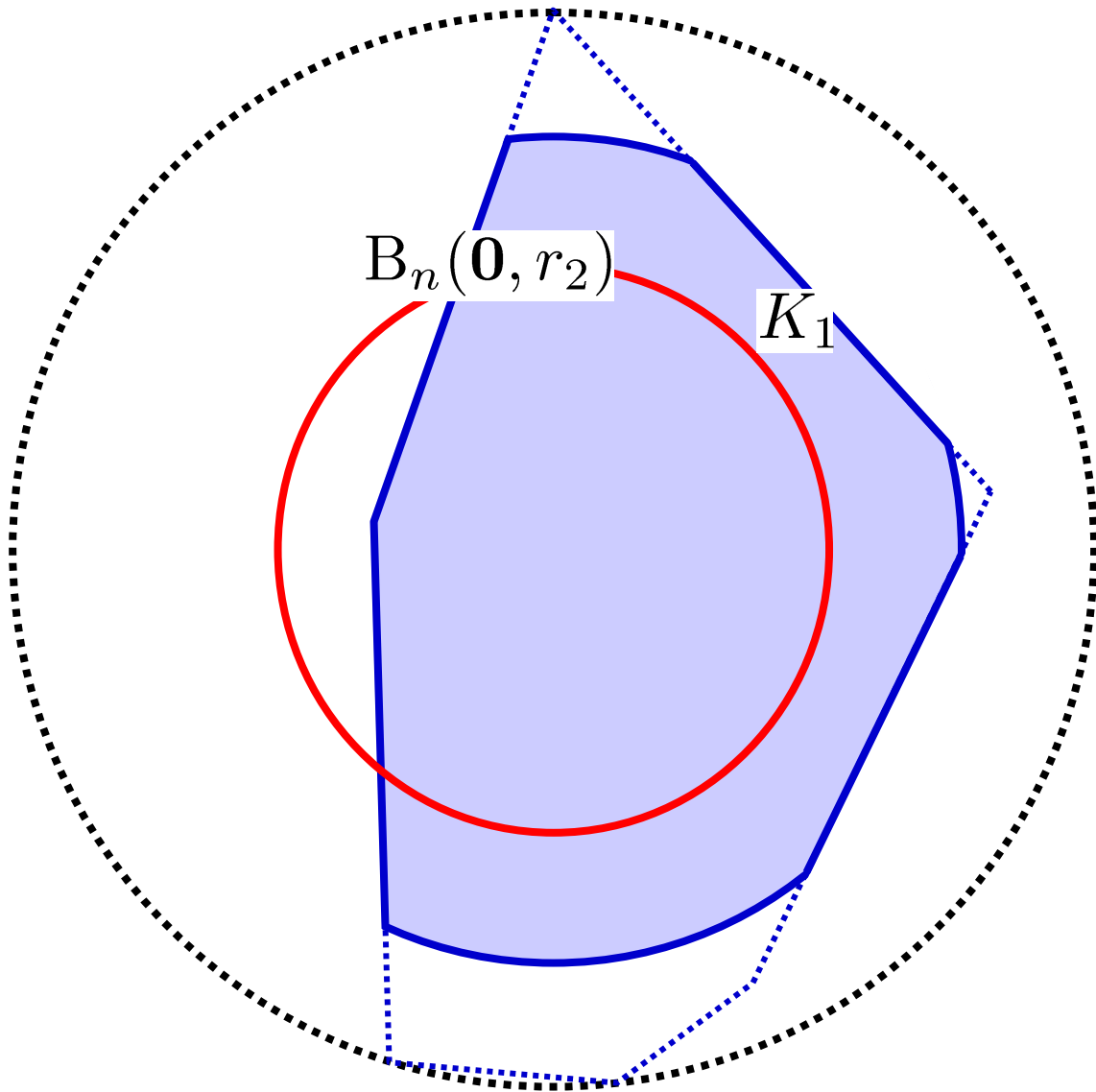


再帰のアイデア

K_1 : n 次元凸体
体積 $V(K_1)$ を計算

$$K_2 \stackrel{\text{def.}}{=} K \cap B_n(\mathbf{0}, r_2)$$

$$V(K_1) = \frac{V(K_1)}{V(K_2)} \cdot V(K_2)$$



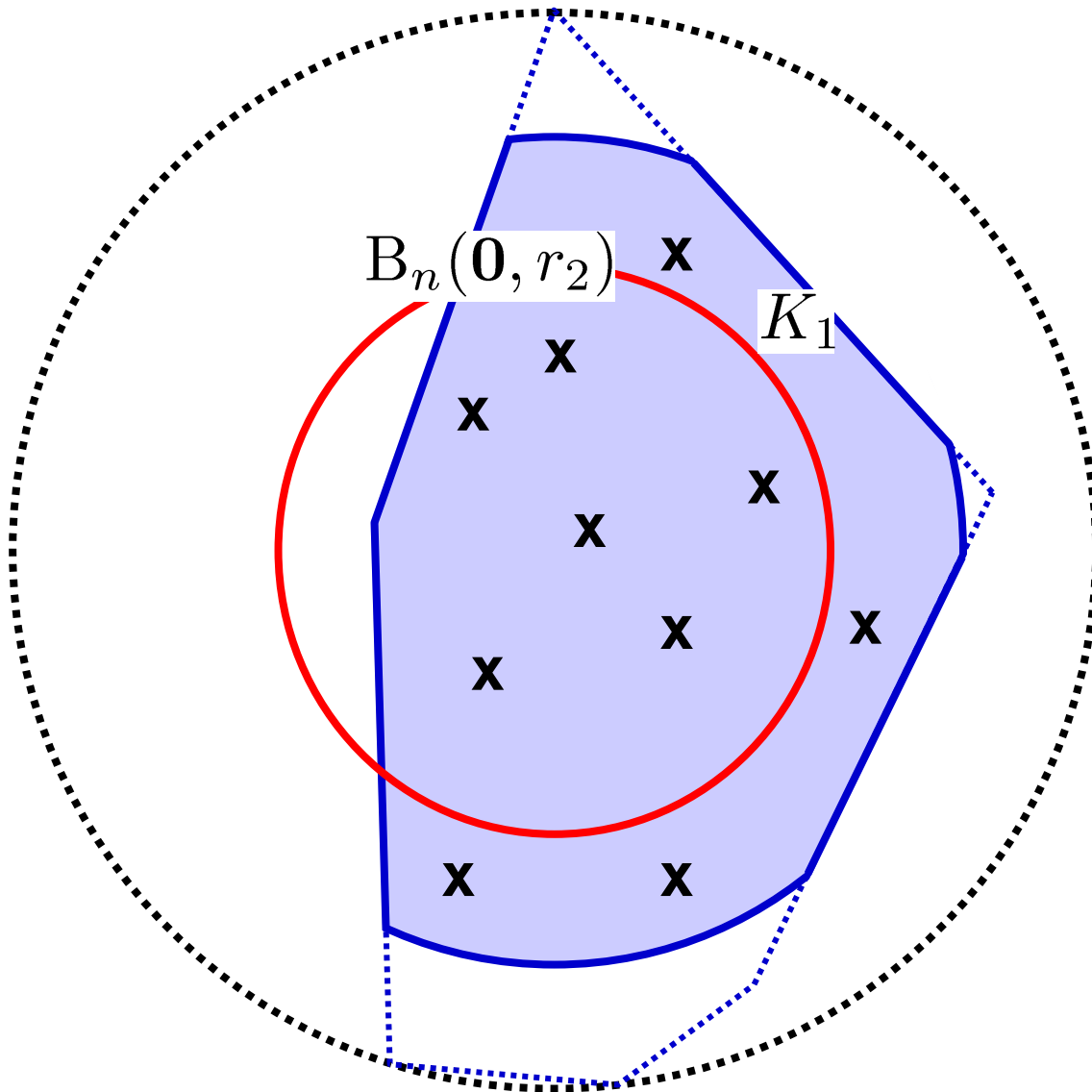
再帰のアイデア

K_1 : n 次元凸体
体積 $V(K_1)$ を計算

$$K_2 \stackrel{\text{def.}}{=} K \cap B_n(\mathbf{0}, r_2)$$

$$V(K_1) = \frac{V(K_1)}{V(K_2)} \cdot V(K_2)$$

↑
モンテカルロ法で計算



再帰のアイデア

K_1 : n 次元凸体
体積 $V(K_1)$ を計算

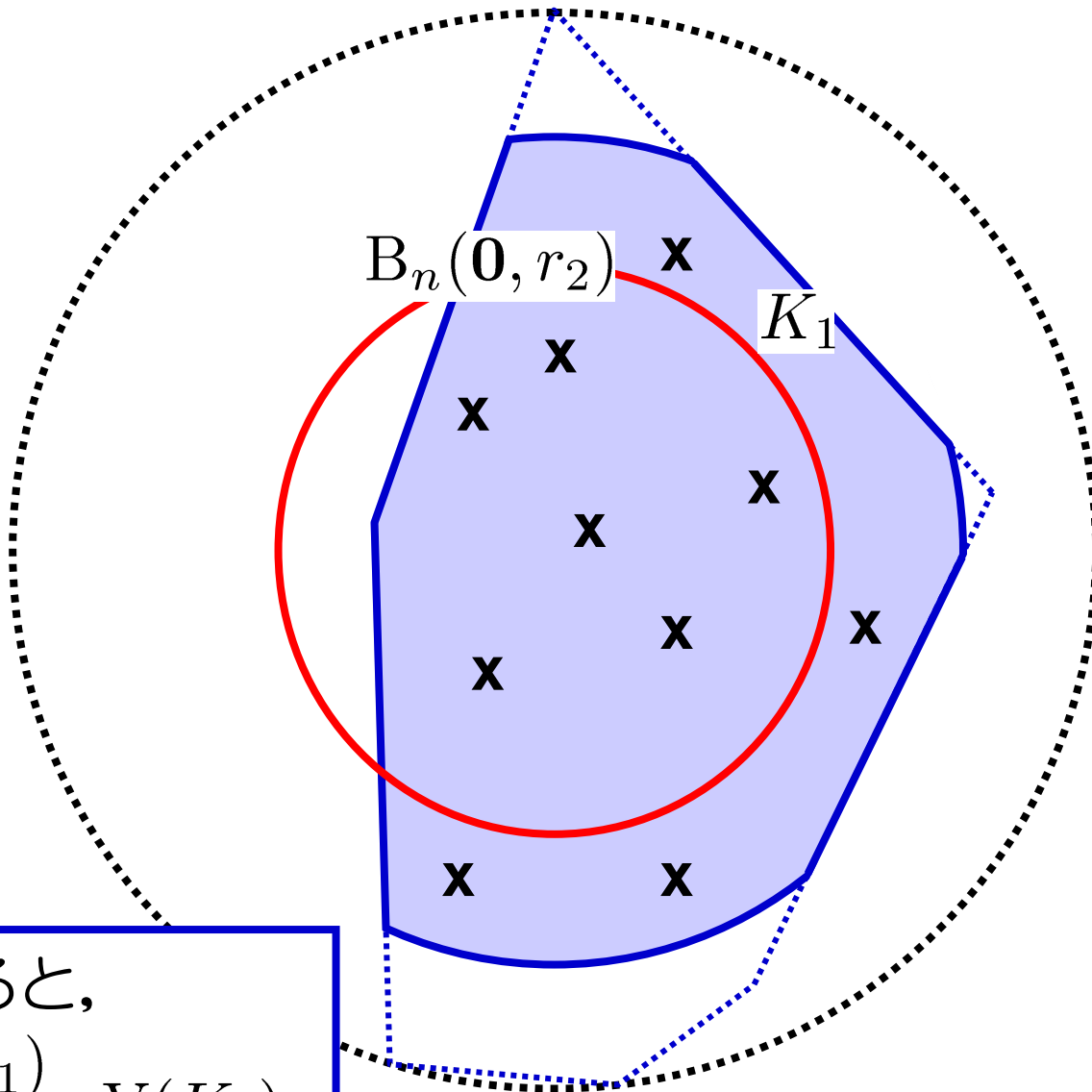
$$K_2 \stackrel{\text{def.}}{=} K \cap B_n(\mathbf{0}, r_2)$$

$$V(K_1) = \frac{V(K_1)}{V(K_2)} \cdot V(K_2)$$

↑
モンテカルロ法で計算

先程の再帰式に代入すると,

$$V(K) = \frac{V(K)}{V(K_1)} \cdot \frac{V(K_1)}{V(K_2)} \cdot V(K_2)$$



再帰式

$$K_i \stackrel{\text{def.}}{=} K \cap B_n(\mathbf{0}, r_i)$$

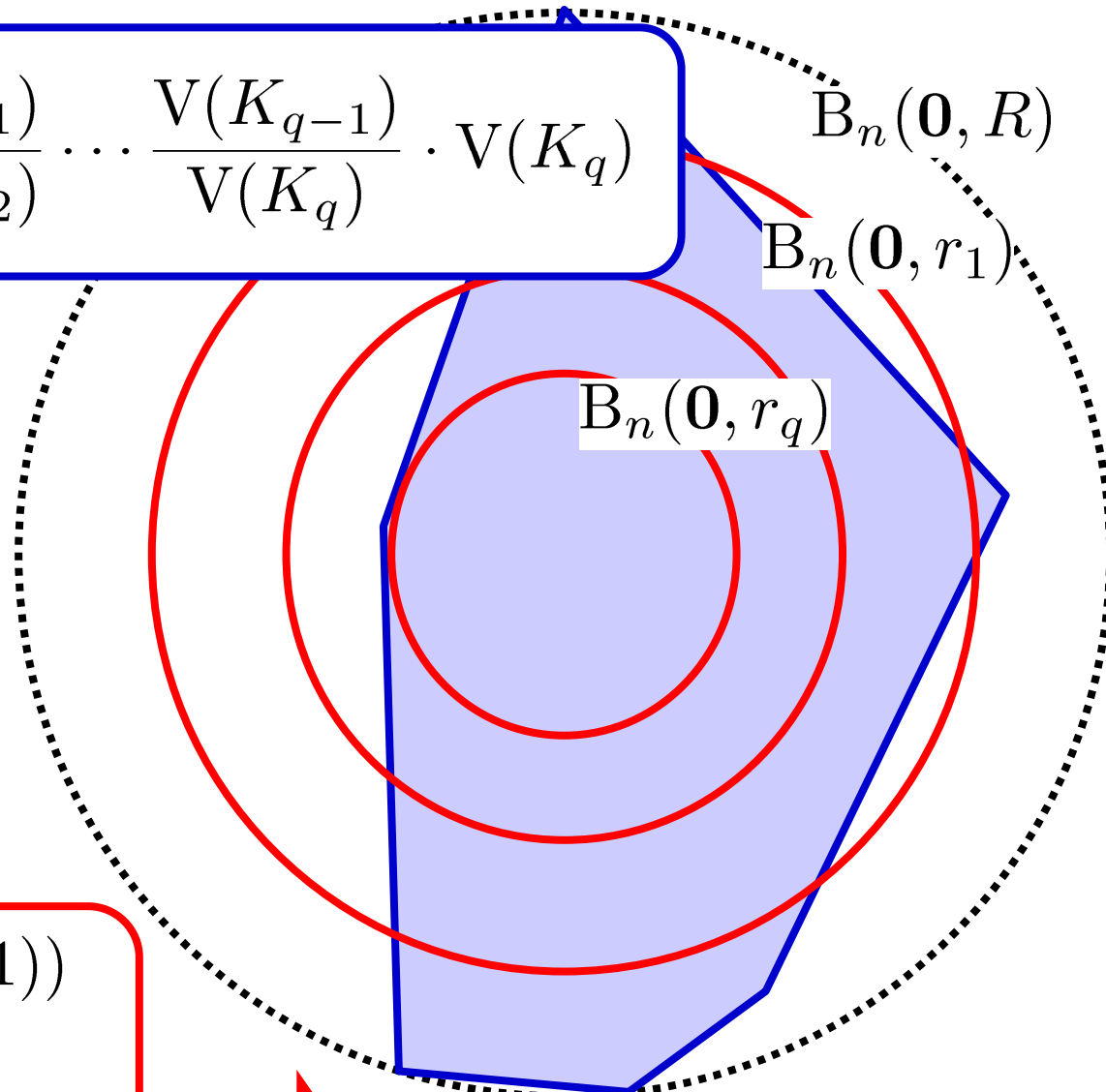
$$V(K) = \frac{V(K)}{V(K_1)} \cdot \frac{V(K_1)}{V(K_2)} \cdots \frac{V(K_{q-1})}{V(K_q)} \cdot V(K_q)$$

(ただし, $r_q = 1$)

$$\begin{aligned} K_q &= B_n(\mathbf{0}, r_q) \\ &= B_n(\mathbf{0}, 1) \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} V(K_q) &= V(B_n(\mathbf{0}, 1)) \\ &= \frac{\pi^{\frac{n}{2}}}{\Gamma(\frac{n}{2} + 1)} \end{aligned}$$

$V(K)$ が求まる!



再帰の回数

再帰の回数 \Rightarrow 少なくしたい

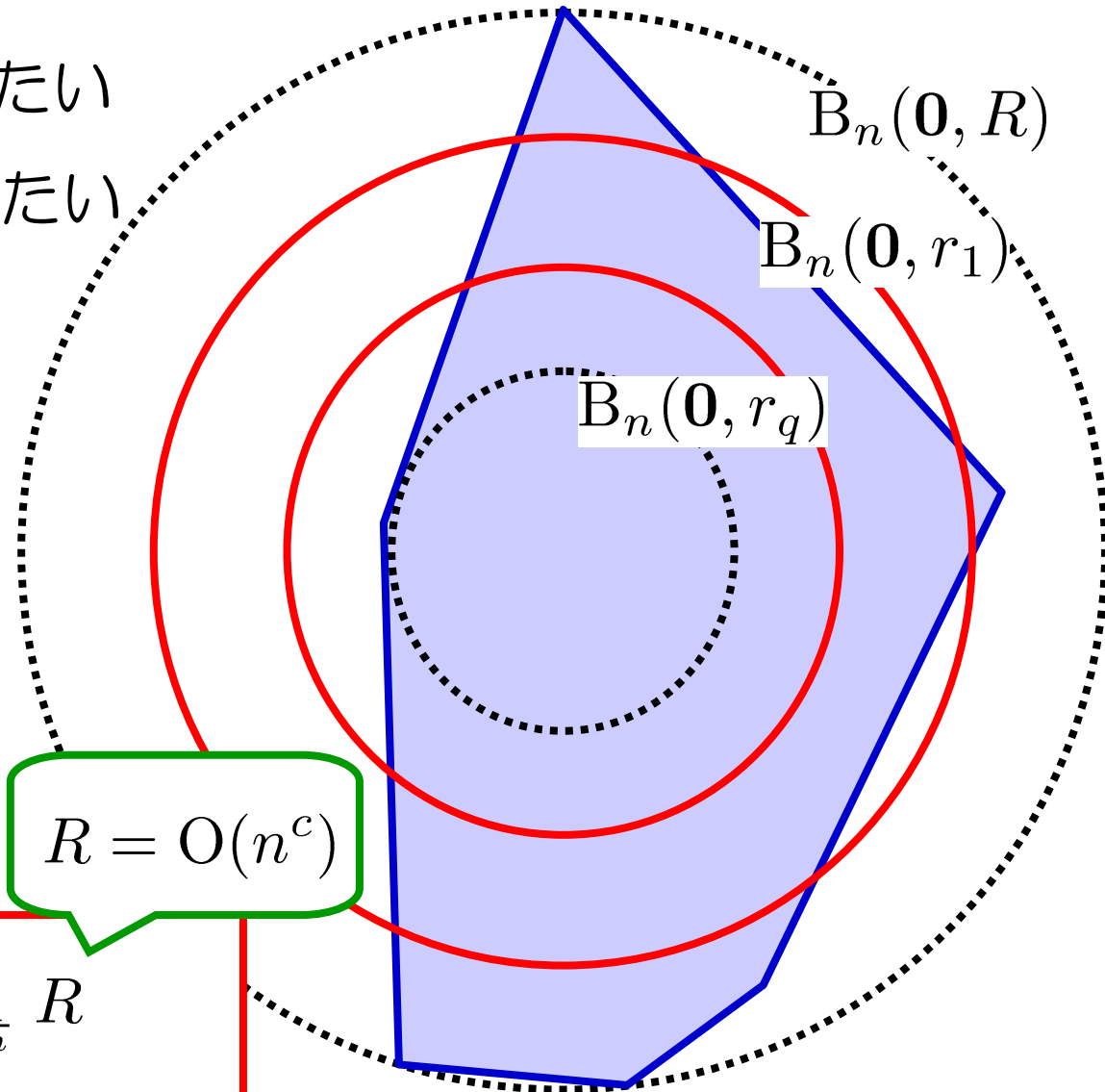
比 \Rightarrow 大きくしたい

$$\frac{r_i}{r_{i-1}} = \frac{1}{\sqrt[n]{2}}$$

比

$$\frac{V(K_i)}{V(K_{i-1})} \geq \frac{1}{2}$$

$$\begin{aligned} \text{(再帰の回数)} &= \log_2 \frac{1}{n} R \\ &= c \cdot n \log_2 n \end{aligned}$$

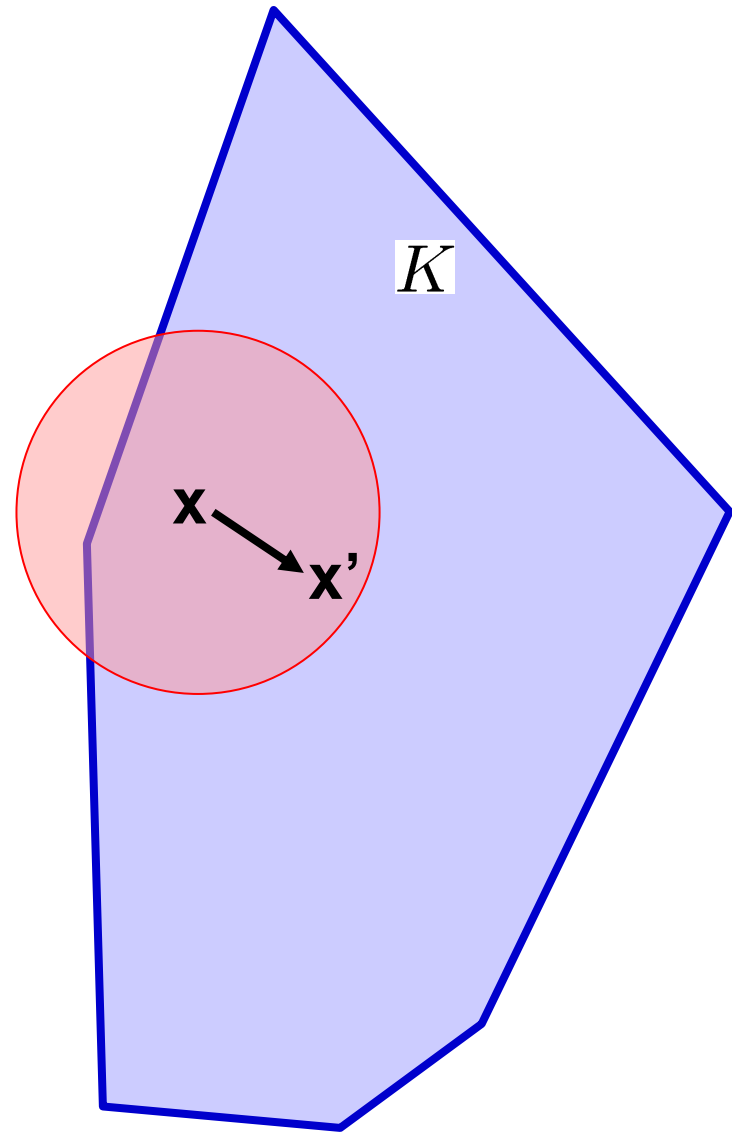


理論的な近似精度保証に向けて

Ball-walk

=> 定常分布は一様.

十分な回数の推移は何回？



理論的な近似精度保証に向けて

Ball-walk

=> 定常分布は一様

十分な回数の推移は何回？

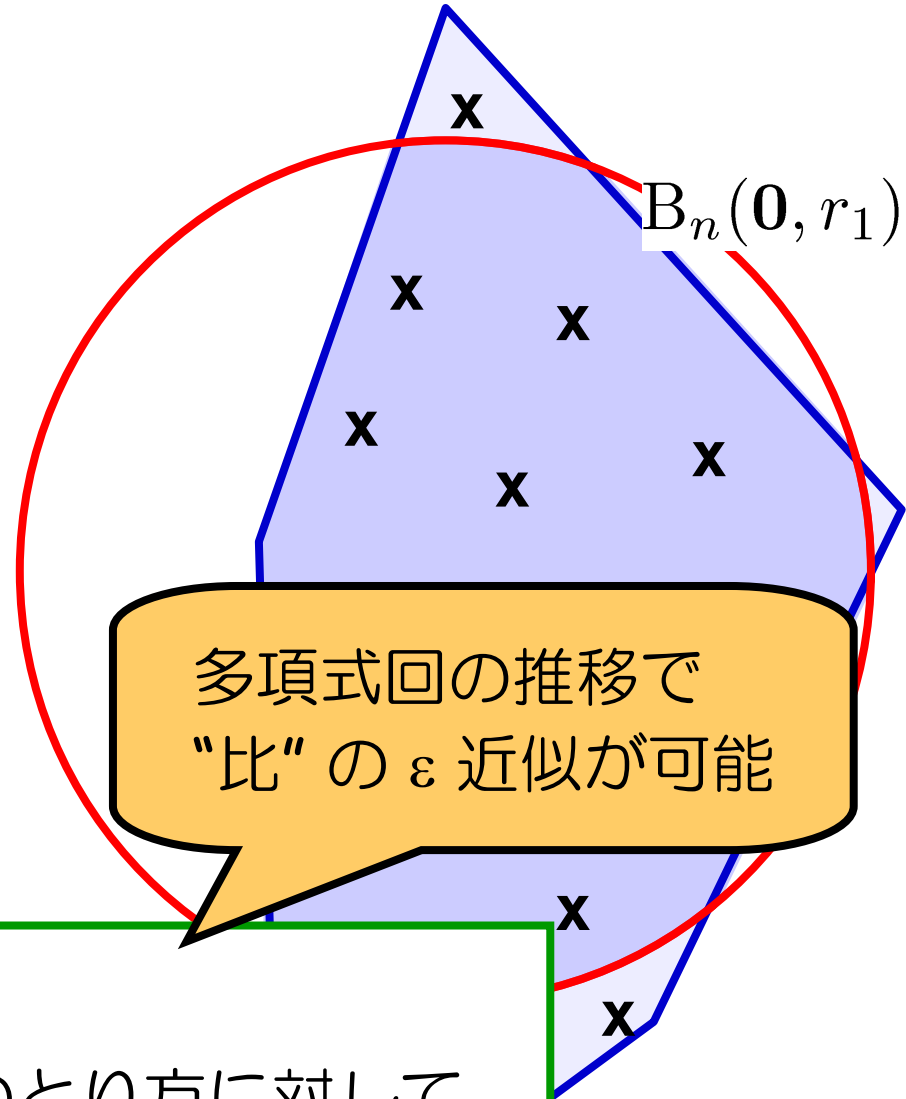
モンテカルロ法

- 真の比 ρ
- 近似比 ρ' (分布の誤差に起因)

$$|\rho' - \rho| < \varepsilon$$

mixing time:

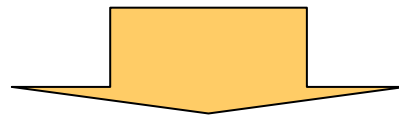
誤差が最大となる部分集合のとり方に対して、
誤差 ε が保証される推移の回数。



3章のまとめ

効率的な再帰的モンテカルロ法を設計するには？

1. 帰着先の割合が大きい
2. 再帰の回数が小さい
3. 帰着先のランダムサンプリングが容易



離散構造の場合は？

MCMC法における近似精度保証 - Table of Contents

1. イントロダクション
2. マルコフ連鎖を用いたランダム生成法
3. 高次元凸体の体積計算
4. 離散構造と数え上げ
 - 4.1. ナップサック解の数え上げ
 - 4.2. 2元分割表の数え上げ
5. パーマネントの計算
6. まとめ

4. 自己帰着可能性と離散構造

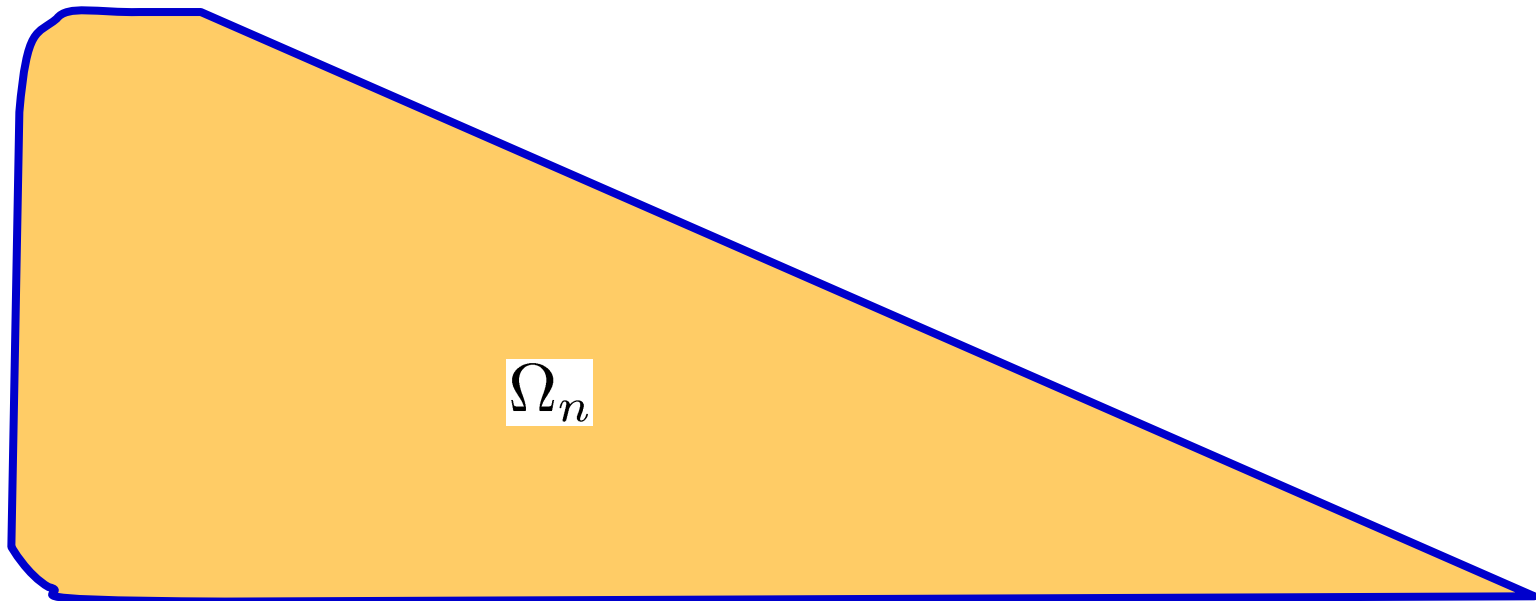
4.1: 0-1ナップサック解の数え上げ

0-1ナップサックの許容解集合

Given

正数 a_1, a_2, \dots, a_n, b .

$$\Omega_n \stackrel{\text{def.}}{=} \left\{ \mathbf{x} \in \{0, 1\}^n \mid \sum_{i=1}^n a_i x_i \leq b \right\}$$



0-1ナップサックの許容解集合

Given

正数 a_1, a_2, \dots, a_n, b .

$$\Omega_n \stackrel{\text{def.}}{=} \left\{ \mathbf{x} \in \{0, 1\}^n \mid \sum_{i=1}^n a_i x_i \leq b \right\}$$

目的

$|\Omega_n|$ の計算

#P完全



Ω_n

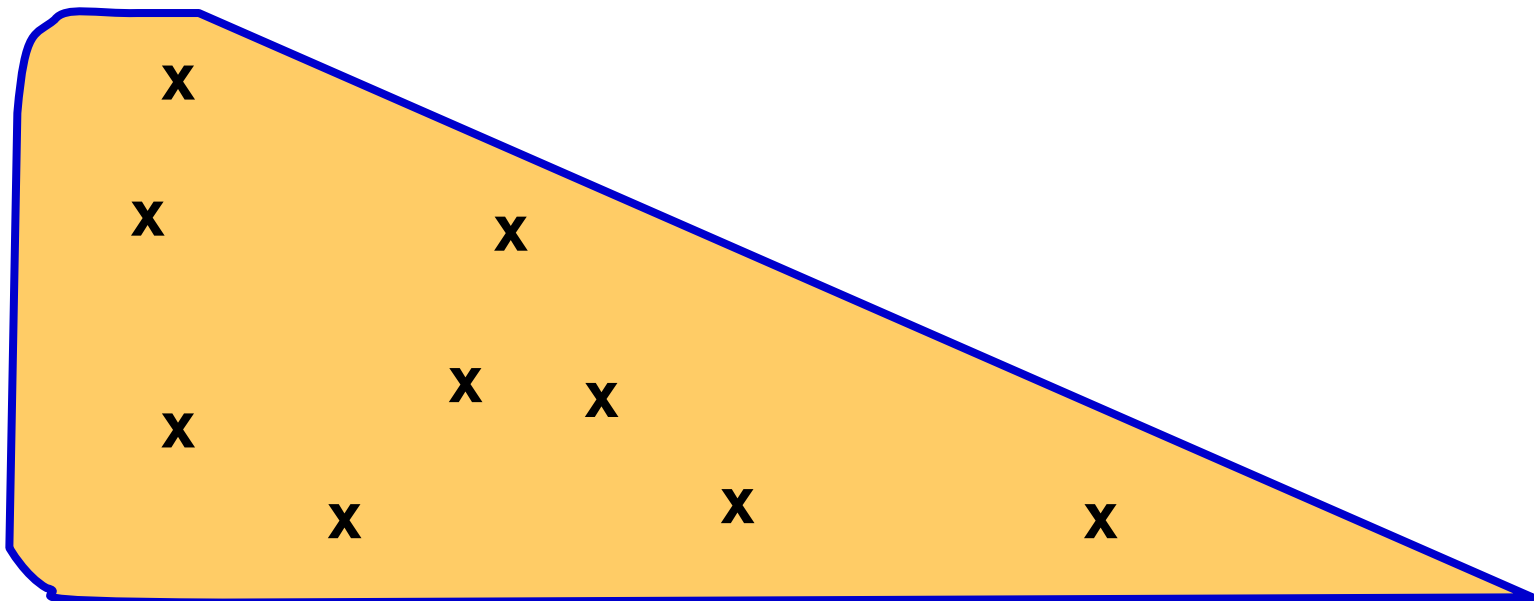
0-1ナップサックの許容解集合上のマルコフ連鎖Given正数 a_1, a_2, \dots, a_n, b .

$$\Omega_n \stackrel{\text{def.}}{=} \left\{ \mathbf{x} \in \{0, 1\}^n \mid \sum_{i=1}^n a_i x_i \leq b \right\}$$

マルコフ連鎖 $X \in \Omega_n$: 現在の状態 X' : 次の時刻の状態Step 1.添え字 $i \in \{1, \dots, n\}$ を一様ランダムに選ぶ。Step 2. X_i の値を変更してもナップサック解なら、
確率1/2でその解に更新。それ以外の場合は $X' = X$ とする。 Ω_n 定常分布は Ω_n 上の一様分布

一様ランダムサンプリング

$$\Omega_n \stackrel{\text{def.}}{=} \left\{ \mathbf{x} \in \{0, 1\}^n \mid \sum_{i=1}^n a_i x_i \leq b \right\}$$



再帰のアイデア

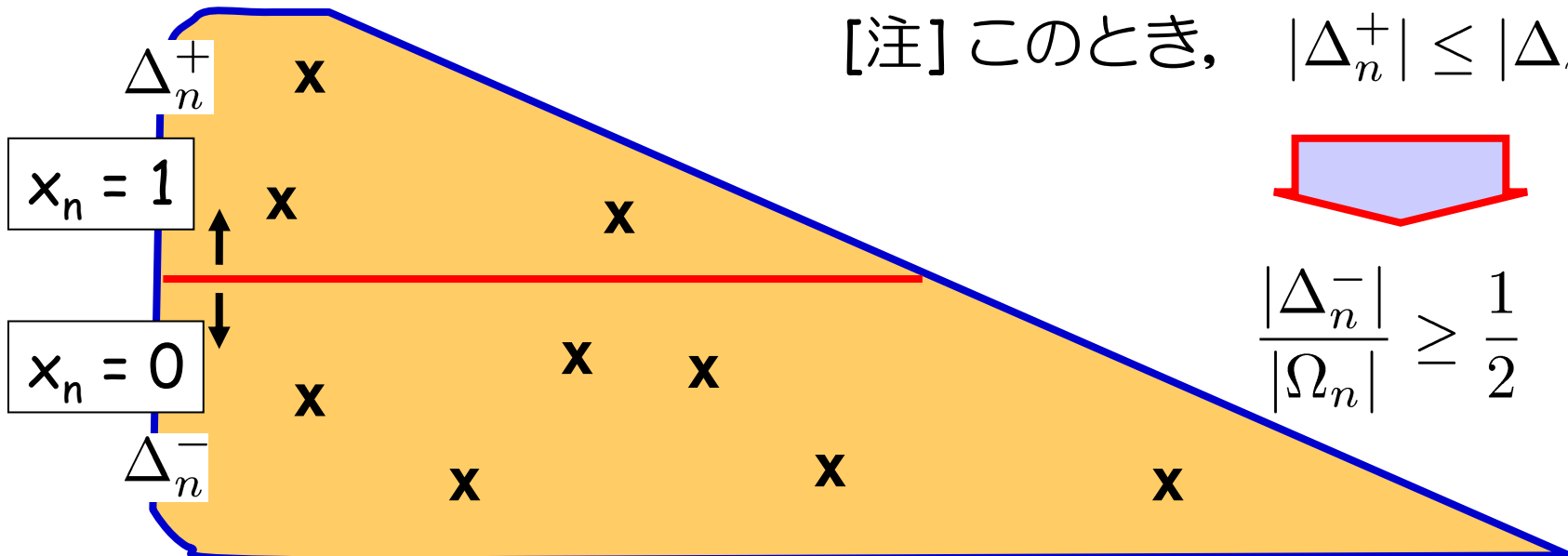
$$\Omega_n \stackrel{\text{def.}}{=} \left\{ \mathbf{x} \in \{0, 1\}^n \mid \sum_{i=1}^n a_i x_i \leq b \right\}$$

$$x_n = 1$$

$$x_n = 0$$

$$\Delta_n^+ \stackrel{\text{def.}}{=} \{ \mathbf{x} \in \Omega_n \mid x_n = 1 \}$$

$$\Delta_n^- \stackrel{\text{def.}}{=} \{ \mathbf{x} \in \Omega_n \mid x_n = 0 \}$$



再帰のアイデア

$$\Omega_n \stackrel{\text{def.}}{=} \left\{ \mathbf{x} \in \{0, 1\}^n \mid \sum_{i=1}^n a_i x_i \leq b \right\}$$

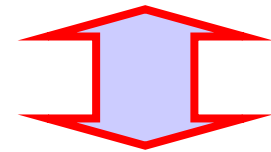
関係式

$$|\Omega_n| = \frac{|\Omega_n|}{|\Delta_n^-|} \cdot |\Delta_n^-|$$

$$|\Omega_{n-1}|$$

$$x_n = 0$$

$$\Delta_n^- \stackrel{\text{def.}}{=} \{ \mathbf{x} \in \Omega_n \mid x_n = 0 \}$$



モンテカルロ法で計算可能

$$x_n = 1$$

$$x_n = 0$$

$$\Omega_{n-1} \stackrel{\text{def.}}{=} \left\{ \mathbf{x} \in \{0, 1\}^n \mid \sum_{i=1}^{n-1} a_i x_i \leq b \right\}$$

$$\Delta_n^-$$

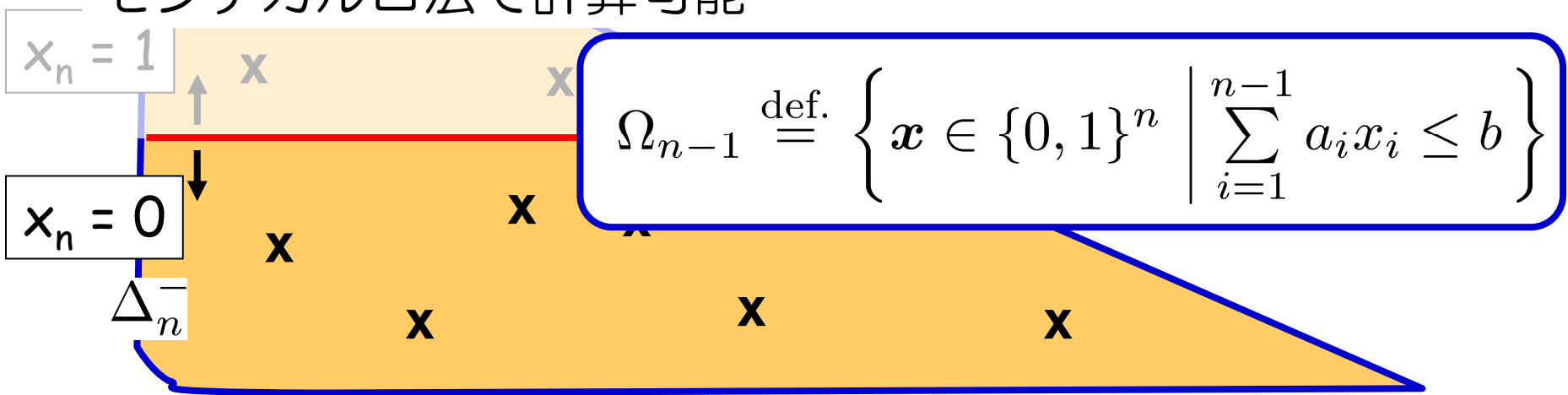
x

x

x

x

x



再帰式

$$\Omega_n \stackrel{\text{def.}}{=} \left\{ \mathbf{x} \in \{0, 1\}^n \mid \sum_{i=1}^n a_i x_i \leq b \right\}$$

$$\begin{aligned} |\Omega_n| &= \frac{|\Omega_n|}{|\Delta_n^-|} \cdot |\Omega_{n-1}| \\ &= \frac{|\Omega_n|}{|\Delta_n^-|} \cdot \frac{|\Omega_{n-1}|}{|\Delta_{n-1}^-|} \cdot |\Omega_{n-2}| \\ &= \dots \\ &= \frac{|\Omega_n|}{|\Delta_n^-|} \cdot \frac{|\Omega_{n-1}|}{|\Delta_{n-1}^-|} \dots \frac{|\Omega_2|}{|\Delta_2^-|} \cdot |\Omega_1| \end{aligned}$$

自己帰着可能性 (self-reducibility)

1. $\Delta_i \subseteq \Omega_i$
2. $|\Delta_i| = |\Omega_{i-1}|$
3. $\frac{|\Delta_i|}{|\Omega_i|}$ が、ある程度大きい。

再帰式

$$|\Omega_n| = \frac{|\Omega_n|}{|\Delta_n|} \cdot \frac{|\Omega_{n-1}|}{|\Delta_{n-1}|} \cdots \frac{|\Omega_2|}{|\Delta_2|} \cdot |\Omega_1|$$

に基づく再帰的モンテカルロ法

Ω_i 上の効率的なサンプリング法が鍵

4. 自己帰着可能性と離散構造

4.2: 2元分割表の数え上げ (問題紹介)

- 輸送多面体中の整数格子点の数え上げ.

2元分割表

2元分割表

- ✓ m 行 n 列の表 ($m \times n$ 行列)
- ✓ 各セルには非負整数が入る
- ✓ (与えられた) 周辺和を満たす

						12
						18
5	4	3	7	5	6	30

cf. Hitchcock 輸送問題の整数解
・ 供給地 2 / 需要地 6

2元分割表

2元分割表

- ✓ m 行 n 列の表 ($m \times n$ 行列)
- ✓ 各セルには非負整数が入る
- ✓ (与えられた) 周辺和を満たす

						12
						18
5	4	3	7	5	6	30

5	4	3	0	0	0	12
0	0	0	7	5	6	18
5	4	3	7	5	6	30

状態A

4	3	1	3	1	0	12
1	1	2	4	4	6	18
5	4	3	7	5	6	30

状態B

0	0	0	1	5	6	12
5	4	3	6	0	0	18
5	4	3	7	5	6	30

状態C

与えられた周辺和を満たす2元分割表の個数を求める問題

⇒ #P完全 (行数を2に固定しても)

2元分割表

2元分割表

- ✓ m 行 n 列の表 ($m \times n$ 行列)
- ✓ 各セルには非負整数が入る
- ✓ (与えられた) 周辺和を満たす

						12
						18
5	4	3	7	5	6	30

- $2 \times n$ 分割表のFPRAS [Dyer, Greenhill 2000]
- $m \times n$ 分割表の再帰構造 [K, Matsui 2002]
- $m^* \times n$ 分割表の多項式時間サンプリング法 [Cryan et al 2002]

未解決

$m \times n$ 分割表の多項式時間サンプリング法

MCMC法における近似精度保証 - Table of Contents

1. イントロダクション
2. マルコフ連鎖を用いたランダム生成法
3. 高次元凸体の体積計算
4. 離散構造と数え上げ
 - 4.1. ナップサック解の数え上げ
 - 4.2. 2元分割表の数え上げ
5. パーマネントの計算
6. まとめ



5: パーマネントの計算

- 2部グラフの完全マッチングの数え上げ

パーマメント

A : 正方行列 ($n \times n$)

$$\text{per}(A) \stackrel{\text{def.}}{=} \sum_{\sigma \in S_n} \prod_{i=1}^n a_{i, \sigma(i)} \quad (S_n: n\text{次の対称群})$$

cf.

$$\text{det}(A) \stackrel{\text{def.}}{=} \sum_{\sigma \in S_n} \text{sign}(\sigma) \prod_{i=1}^n a_{i, \sigma(i)}$$

各項は2部グラフの
完全マッチングに対応

2部グラフの完全マッチング

#P完全 [Valiant 1979]

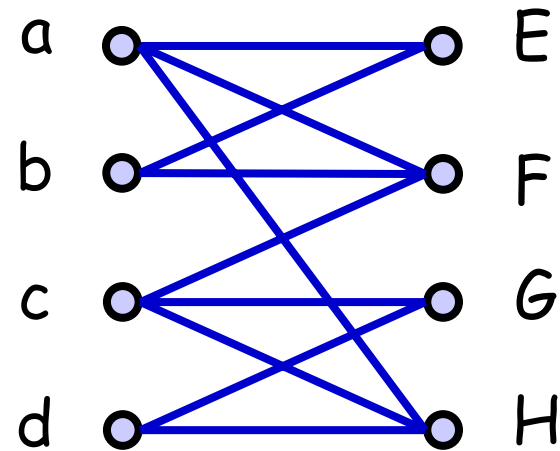
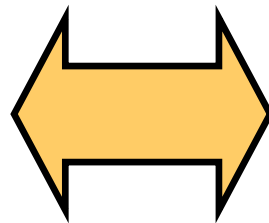
A: 0-1正方行列 (n×n)

$$\text{per}(A) \stackrel{\text{def.}}{=} \sum_{\sigma \in S_n} \prod_{i=1}^n a_{i, \sigma(i)}$$

(S_n : n次の対称群)

$$\begin{array}{c} E \\ F \\ G \\ H \end{array} \begin{pmatrix} a & b & c & d \\ 1 & 1 & 0 & 0 \\ 1 & 1 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 1 \\ 1 & 0 & 1 & 1 \end{pmatrix}$$

パーマメント

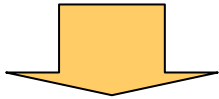


完全マッチングの個数

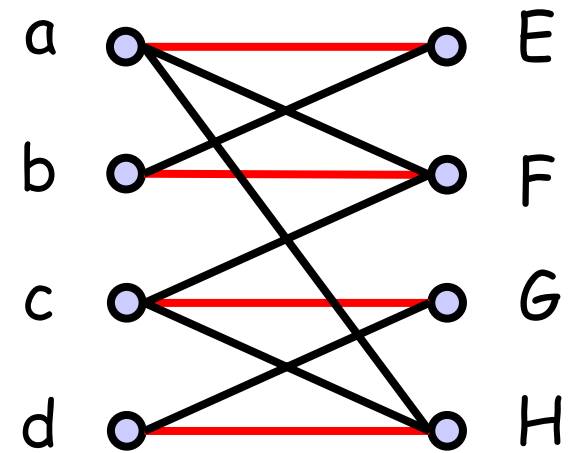
完全マッチング上のマルコフ連鎖の設計は難しい

$\Omega :=$ 完全マッチング全体の集合

$X \in \Omega$: 現在の状態



次の時刻の状態???



状態空間: n マッチング + $n-1$ マッチング [Broder 1986]

$\Xi := n$ マッチング + $n-1$ マッチング

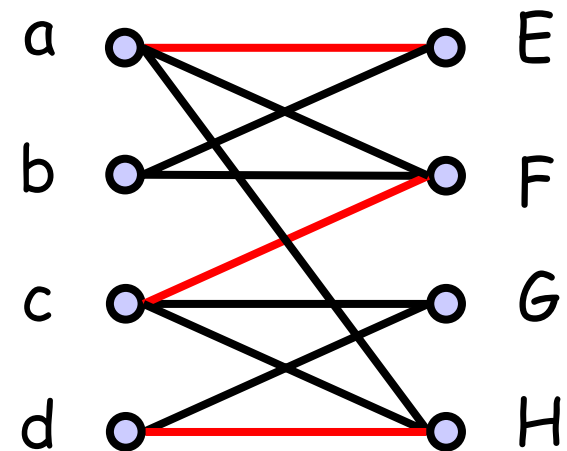
状態空間: Ξ

推移規則:

枝 e を一様ランダムに選ぶ。

- X が n マッチングの場合
- X が $n-1$ マッチングの場合

定常分布: Ξ 上の一様分布



状態空間: n マッチング + $n-1$ マッチング [Broder 1986]

$\Xi := n$ マッチング + $n-1$ マッチング

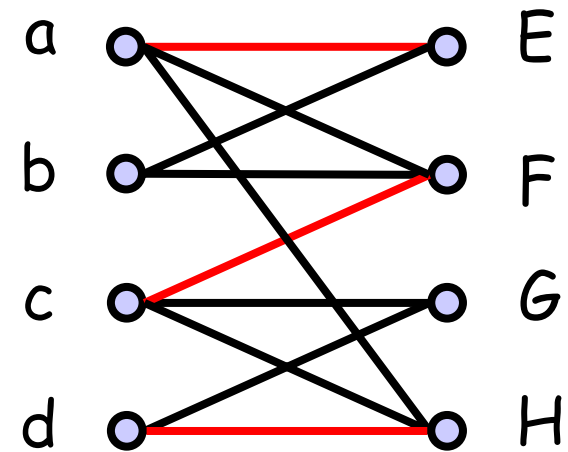
状態空間: Ξ

推移規則:

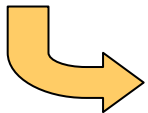
枝 e を一様ランダムに選ぶ。

- X が n マッチングの場合
- X が $n-1$ マッチングの場合

定常分布: Ξ 上の一様分布



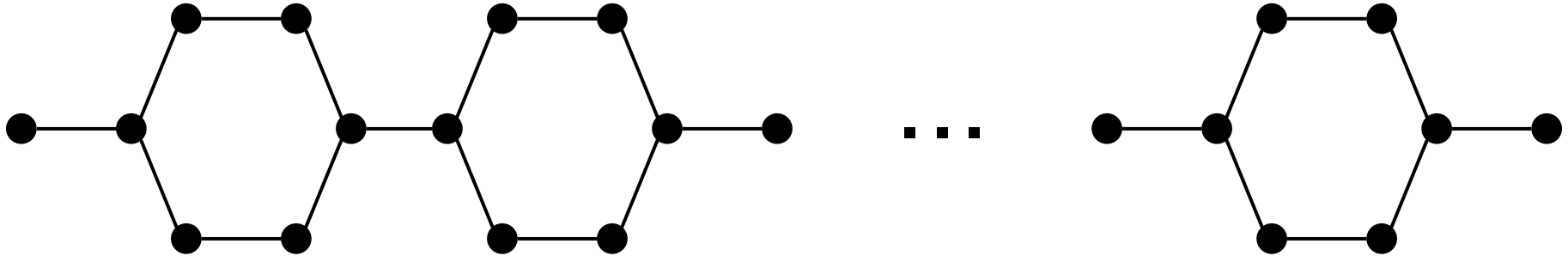
rapidly mixing [Jerrum, Sinclair 1993]



棄却サンプリング?

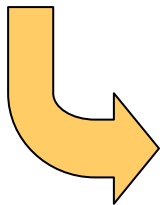
棄却サンプリングは非効率的

k-hexagon



$n-1$ マッチングの個数 $\cong 2^k \cong 2^{n/6}$

完全マッチングの個数 = 1



棄却サンプリングでは、

完全マッチングを得るのに指数時間かかる

FPRAS [Jerrum, Sinclair, Vigoda 2001]

“アニーリング”を利用したアルゴリズム

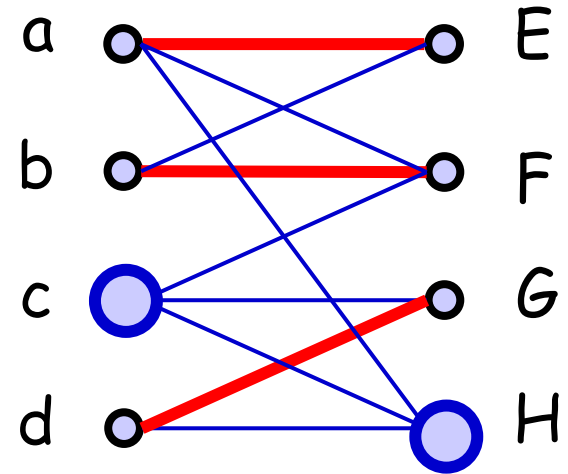
FPRAS [Jerrum, Sinclair, Vigoda 2001]

問題点: (一般には) $n-1$ マッチングの比率が大きい。

アイデア 1.

マッチングに“重み”をつけて、
重みに比例する確率分布を考える。

マッチング重み関数 $w: \text{"hole"} \rightarrow \mathbb{R}_+$



hole: $n-1$ マッチングで、
マッチングされて
いない頂点对

$$\sum_{X \text{ が完全マッチング}} w(X) = \sum_{X \text{ が } n-1 \text{ マッチング, } [u,v] \text{ が hole}} w(X)$$

X が完全マッチング

X が $n-1$ マッチング,
[u,v] が hole

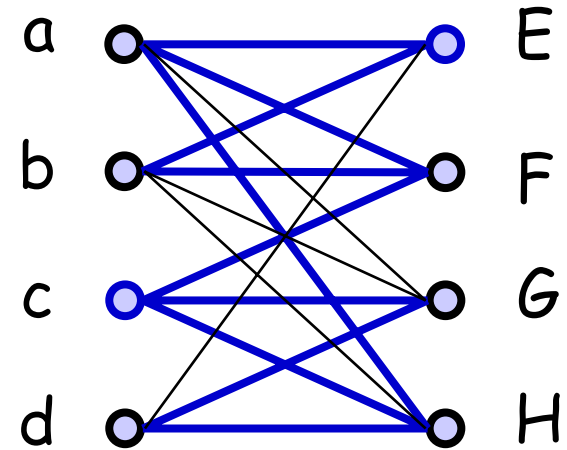
重み関数 w の計算が困難. \Rightarrow “アニーリング” を利用

FPRAS [Jerrum, Sinclair, Vigoda 2001]

アイデア 2.

完全2部グラフ + 枝活性度

=> 活性度を“アニーリング”する.



- ・ 状態空間: n マッチング+ $n-1$ マッチング
- ・ マッチング重み関数: 現在の枝活性度に関して

枝活性度の積

$$\sum_{X \text{ が完全マッチング}} w(X) \cdot \lambda(X) \cong \sum_{X \text{ が } n-1 \text{ マッチング, } [u,v] \text{ が hole}} w(X) \cdot \lambda(X)$$

- ・ 定常分布: (枝活性度の積) \times (マッチング重み) に比例

枝活性度を“アニーリング”しながら, 重み関数 w を算定.

<= “平均” の近似計算 by モンテカルロ法



6: Concluding Remarks

まとめ

MCMC法と近似精度保証

key word: 自己帰着可能性 (self-reducibility)

1. 帰着先の割合が大きい
2. 再帰の回数が小さい
3. 帰着先のランダムサンプリングが容易

(理論的な厳密さを追求しなければ)

アイデアはそれほど難しくない。

ぜひ、MCMC法を使ってみましょう！

今後の課題

未解決問題 [多項式時間収束のマルコフ連鎖]

- ✓ 2元分割表 ($m \times n$)
- ✓ マトロイドの基
- ✓ 分配束構造
- ✓ グラフ中の森
- ✓ コーダルグラフサンドイッチ

離散の難しさ (連続との比較)

- 非等方性
- スケーリングの難しさ

関連する話題

- ◆ 統計学: bridge sampling, path sampling
- ◆ 統計物理: レプリカ交換法, 拡張アンサンブル法
- ◆ 最適化: annealing



The end

Thank you for the attention.